

ボランティア1・2・3

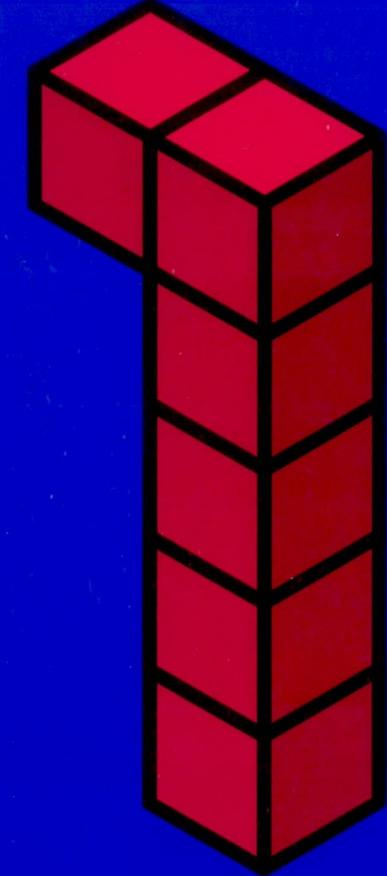
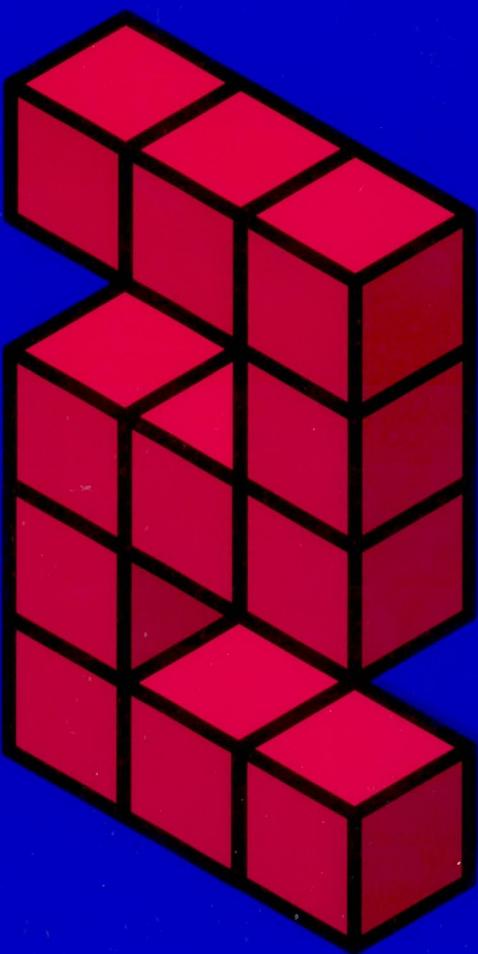
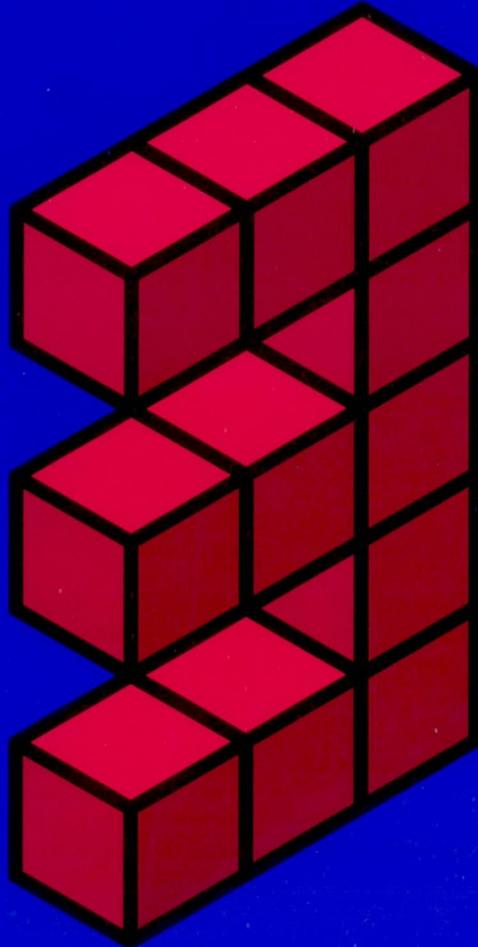
児童館のボランティア「コーディネーター」

地域に発進!!

ワン

ツー

スリー





もくじ

はじめに 1

ボランティアがいる すてきな児童館 2

ボランティアの効果 児童館にボランティアが いることの効果は何か? 4

- ①児童館・行政・職員に対しての効果 4
- ②地域にとっての効果I(児童館の利用者) 4
- ③地域にとっての効果II(児童館の非利用者) 5
- ④ボランティア自身への効果 5

特別寄稿1「ボランティア活動の魅力」
「児童館とボランティア」
財団法人 児童健全推進財団 依田 秀任 6

特別寄稿2「ボランティア活動の魅力」
**「児童館でボランティア活動を
受け入れる有効性について」**(大型児童館の立場で)
神戸市総合児童センターこべっこランド 久保 和功 8

ボランティアの 受け入れへのステップ 10

- 募集のしかた・受付方法 10
- 事前打ち合わせ・ボランティアに対する研修 12
- 活動への参加／活動後のふりかえり 13
- 活動の記録 14
- ボランティアが活動しやすい環境を考える 15

特別寄稿3「ボランティアの受け入れ」
「ボランティアがやってきた!」
宮の台児童館 千葉 雅人 16

特別寄稿4「ボランティアの受け入れ」
「ボランティアの養成」
ハンズ・オン ブランディング 染川 香澄 18

ボランティア 活動活性化のポイント 19

- ボランティアへの対応①「ボランティアの意欲を大切に」 20
- ボランティアへの対応②「定期的なミーティング」 21
- ボランティアへの対応③「ボランティア研修の必要性」 22
- ボランティアへの対応④「活動環境、条件を整える」 23
- ボランティアへの対応⑤「ボランティア自身の自立」 24
- ボランティアへの対応⑥「ボランティアの人材確保」 25

- ボランティアの考え方①「ボランティアの捉え方」 26
- ボランティアの考え方②「魅力的な児童館づくり」 27
- ボランティアの考え方③「スタッフの意識、姿勢」 28
- ボランティアの考え方④「地域との連携」 29
- ボランティアの考え方⑤「児童館の使命」 30

特別寄稿5「ボランティアの活性化」
**「児童館職員のボランティア
コーディネートに必要な視点」**
世田谷ボランティア協会 山崎 富一 31

特別寄稿6「ボランティアの活性化」
「児童の健全育成活動の活性化に向けて」
～なぜ ボランティアが必要か?～
大正大学大学院 吉澤 英子 32

ボランティア ここが困った!一問三答 33

- Q1 ボランティアへのお礼の考え方 33
- Q2 ボランティアとスタッフの関係づくり 34
- Q3 継続的な活動を推進するには 35
- Q4 学生ボランティアの活性化 36
- Q5 施設ニーズ・ボランティアのニーズ 37
- Q6 熱意が違う方向に向いている 38
- Q7 ボランティア体験学習への対応 39
- Q8 少ないスタッフでのコーディネート 40

児童館における ボランティア活動の 実態調査 41

「小・中学生 ボランティア交流事業」 3年間の歩み 45

地域に発進!! ボランティア1・2・3
編集専門委員会 委員会記録 48

編集後記 49

はじめに

1990年代にはいり、ボランティア活動は大きな変化を迎えるました。たとえば、活動分野の多様化がひとつの例でしょう。福祉分野だけにかかわらず、国際交流・災害救援・教育等に広がっています。また、それとともに、ボランティア活動を推進する機関も多様化してきています。ボランティアセンターも各地域におかれ、「ボランティアをやってみたい」と希望する市民の声に対応できるようになりました。学校教育の場面でもボランティア体験学習の重要性が示されるようになりました。このように、日本全体でボランティアを行う人、機会、場所がどんどん増えていると考えて良いでしょう。

児童館では最近『地域活動における拠点』として、その機能が求められています。それには地域住民(ボランティア)が児童館事業に積極的に参加していくということが非常に重要になってきます。しかし、実際には児童館職員がボランティアを受け入れることに大きな戸惑いを感じていることも確かです。また、受け入れをしていても、なかなか活性化しないと悩んでいるのも確かです。

本書作成にあたり、ボランティア活動に関わるさまざまな分野の先生方で構成される『地域に発進!! ボランティア1・2・3 編集専門委員会』を設置し、全国の児童館へボランティアの実態調査を行いました。その結果を専門

委員会にて分析、検討し、とりまとめました。本書は児童館のボランティアコーディネート機能を高め、児童館におけるボランティア活動の活性化を狙いとした実践書です。

「初めてボランティアを受け入れようと思っているが、何から始めたらよいのか?」

「ボランティア活動をもっと活性化したい」

「ボランティアは活動しているが、いろんな悩みがあつて困っている」

「大切なのはわかるけれど、大変そうで……」 etc.

こうした具体的な、悩み、疑問に対して答えることができればと思います。少しでも多くのボランティアが、活き活きと活動できるよう、そしてその力が多くの中もたちの健やかな成長を支えられるようになればと考えています。

忙しい業務の合間にアンケートに答えていただいた児童館職員の皆様、また本書とりまとめにご尽力いただきました専門委員会の皆様にお礼申し上げます。

なお、本書は社会福祉・医療事業団(子育て支援基金助成事業)の助成を受け作成しました。

国立総合児童センター こどもの城

地域に発進! 児童館ボランティア



4

ニコニコあそび フェスティバル



2

ボランティアの効果

児童館にボランティアがいることの効果は何か？

1 児童館・行政・職員に対する効果

●プログラムの拡充、深化が期待できる

ボランティアは職員のもっていない、さまざまな知識、技術を持っています。それを活かすことができれば、幅広いプログラム活動が可能になります。また、たとえ特別な技術を持っていなくても、多様な価値観を持った人間が集まり、わいわいと企画会議を行えば、今までにないアイディアも生まれてくるでしょう。

●運営のサポート

『人手不足の解消』は消極的な期待感だと書きましたが、それはボランティアによって子どもに関わるスタッフが増えることは『プログラムの質が向上する』と考えて欲しいからです。安全面はもちろんのこと、一人ひとりの子どもたちへの細やかな対応も可能になります。そして、こうした多くの人的サポートは、スタッフの仕事に対する姿勢を積極的にさせるのではないでしょうか。今まで「スタッフが少ないから、これぐらいしかできない」と思っていたのが、「これだけの人が集まってくれれば、あんなことができるな、これができるな」と夢を膨らますことができるようになると考えます。結果的には、子どもにとって魅力的な児童館づくりにつながるのではないかでしょうか。

●コミュニケーションが豊かになる

地域に存在する児童館にとって、「地域が今児童館に何を求めているのか」を知ることはとても重要なことです。ボランティアは地域に住む住民であることが多いので、ボランティアは地域の声を児童館に届けてくれる存在だと考えても良いのではないでしょうか。子ども、母親、父親、おじいちゃん、おばあちゃん等それぞれの立場から、いろんな声が聞こえてきます。ただ、ボランティアがいつも、それを意識しているとは限りません。スタッフはボランティアとの何気ない会話の中に、地域の風を感じなければいけません。それを事業展開への結びつけていくのが、専門職としての役割だと考えます。

2 地域にとっての効果I (児童館の利用者)

●子どもたちがさまざまな人と会える

ボランティアが子どもたちに与える効果はたくさんあると思いますが、その中でも一番の効果として考えられるのが『世代を越えた交流体験』ということでしょう。地域社会の人間関係が希薄化し、核家族化の進む現代社会において、子どもたちが普段の生活の中で会える人は限られてしまいました。子どもたちと年齢が近く、一緒になって遊ぶことのできる若いボランティア、子どもたちが知らない遊びや、生活の知恵や技術を知っている高齢者のボランティア、こうした人達との交流はどれほど子どもたちにとって魅力的で、貴重なものでしょう。なによりも、自分がさまざまな人たちとつながって生きていることを実感できる体験が『世代を越えた交流体験』で可能になってくるのではないでしょうか。

●親や関係団体の子どもたちに対する意識が向上する

児童館には子ども以外の大人が出入りすることがあります。子どもの保護者であったり、地域の関係団体の人たちであったりします。その大人たちが、児童館で活動するボランティアと会うことで、同じ地域住民として、地域の抱えるさまざまな問題に気づくきっかけになるのではないでしょうか。

今回の全国調査で約70%以上の児童館でボランティアを受け入れているという回答がありました。おそらく、このボランティアの参加がある児童館では、スタッフがボランティアに対して、何か施設にもたらす効果を期待しているのだと思います。しかし「その効果は何?」とあらためて聞かれると、以外と明確に答えることが難しいものです。「なんか、役立ちそう」とあいまいな答えもあれば、「職員が少ないから、人手不足の解消になる」という、消極的な答えも多いのではないかでしょうか。専門スタッフとして、ボランティアがもたらす効果の明確化はとても重要なことです。それは、ボランティア活動そのものの活性化につながることはもちろんのこと、地域を含めた社会全体からの理解と応援も可能になると考えます。アンケートに『児童館にボランティアがいることのメリットは何ですか?』という自由記述欄をのせました。2,000件近いさまざまな解答が寄せられ、それを専門委員会で分析し、次のようにまとめてみました。

3 地域にとっての効果Ⅱ (児童館の非利用者)

●市民としてできることに気づく

ボランティアがもたらす効果は、児童館の利用者ばかりとは限りません。日頃児童館に興味のない、訪れたことのない地域住民にも働きかけることがあります。たとえば、ボランティアが児童館以外の場所で交わす何気ない会話の中に、児童館での活動の話をする機会があるでしょう。「今度児童館で行事があるけど、人が足りないから手伝いに来てよ」とより具体的な話ができるかもしれません。たとえ興味のない人でも、「あー、あそこはそんなことをやっているんだ」と児童館のことを知る機会になります。そして、児童館に対する興味関心は、隣人であるボランティアの力を借りて「私もできることをやってみよう」という意識の変容と、地域社会に対するアクションにつながるのではないかでしょうか。



4 ボランティア自身への効果

成長したボランティアは、自分自身の活動を振り返り、「結局自分のためになった」と思うことが多いそうです。ボランティア活動は、自分のできることを、児童館や子どものために行う社会に開かれた活動です。しかしそれをつきつめて行くと、ボランティア自身が活動を通じて、児童館や子どもと共に成長していくのではないかでしょうか。こんな視点が、アンケートにありました。

●健全育成活動に対する意識の向上

ボランティア活動を行うことによって、さまざまなことを考える機会に恵まれます。そしてそのプロセスを通して、子どもに対する理解も深まるでしょう。また児童館への理解や地域社会の抱てる問題にも気づいていく機会になります。

●ボランティア自身の自己実現の場

さまざまな価値観を持った人々や社会から、理解や承認を得られることで、人は自己実現に至るといわれています。ボランティアはまさに、子どもやそれを取り巻く大人、社会に認められながら進めていく活動です。自分の可能性を信じて、子どもやスタッフと共に、夢を具現化させていく。それは、ボランティア自身に生きる活力を与え、豊かな人生を送る一助になるのではないかと考えます。

特別寄稿1 「ボランティア活動の魅力」

「児童館とボランティア」

1 児童館活動にボランティアありき

児童館は子どもたちに遊びを提供することと併せて「児童の健全育成に関する総合的な機能を有するものであること」とされています。広義的には地域全体で取り組む健全育成の体制づくりもその役割の範ちゅうです。遊びを指導するために置かれる児童厚生員は「児童館の設置運営要綱」で2名以上とされています。施設の規模によって差はありますが、児童館の平均利用者数は1日67.4人。(平成13年10月厚生労働省調査) およそ少ない職員で地域の多くの子どもたちを支援するわけですから、児童館の運営やその活動はそもそもボランティアの参加・協力を前提としていることがわかります。さらに「児童館の設置運営について」(局長通知)では「地域の特別な技能を有する有志指導者(ボランティア)に協力を求めるとともに、その養成に努めること」と補っています。実はこれは児童館の運営姿勢を決めるといつていいほど重要な事項で、平易に言い換えれば「ボランティアの発掘・育成・助長は児童館の役割の一つ」だというところなのです。

2 ボランティアの参加実態

今回の調査では、ボランティアの参加が「ある」児童館が73.7%、「ない」のは26.3%でした。過去の同様の調査結果と比較(右図参照)すると、児童館におけるボランティアの参加はおよそ20年で1割ほど増加していることが見て取れます。早いとみるか遅いとみるか見解のわかれるところですが、昭和59年の調査でボランティアを受け入れない理由にあがっていた「職員だけで十分」(19.2%)や「原則的に必要ない」(7.9%)、「足手まとい」(2.6%)といった意識は変わってきているように思われます。しかし、今回の調査結果でも「事業が忙しく手が回らない」(28.3%)などの理由で、まだ約3割の児童館はボランティアの参加が「ない」状態で運営されていることが明らかとなりました。これから児童館活動においては、「手が空いたら」とか「余力があれば」といったレベルでボランティアの養成に取り組むのではなく、子どもたちへの直接的指導法と同様の力点がおかれた間接的援助法として基本機能に組み込まれることが肝要です。



依田 秀任 (よだ ひでとし)

京都市生まれ。同志社大学で教育学を専攻。民間の児童館や放課後児童クラブ、保育所での勤務経験を経て、社団法人全国児童館連合会に出向。同時期、京都市児童館学童連盟で主任厚生員を兼務する。現場での経験をベースに各自治体や児童厚生員養成校の講師などを担当。現在、財団法人児童健全育成推進財団の事務局次長として、児童厚生員研修会の企画や健全育成関係の調査研究、テキスト・事例集の出版などの業務に携わっている。

財団法人 児童健全育成推進財団
依田 秀任

3 ボランティアがもたらすもの

児童館の活動が、そこにいる児童厚生員の趣味や能力の範囲内で、また児童館の都合で固定化されるとしたら、子どもたちの多様なニーズに応えることはできません。もし仮に万能な職員や豊富な人員がいて職員だけですべての活動ができるとしても、地域福祉の視点ではそれは矮小化した健全育成活動と言わざるを得ません。ともすれば“自給自足”的活動になりがちな体質を正常化するためにボランティアの新しい息吹は欠かせません。児童館活動にボランティアが参画する5つの効果とメリットをあげてみましょう。

①子どもたちに効く

子どもたちがいろいろな人にふれ、多様な活動の中で経験を広げる

②地域に効く

健全育成の協力者が増えることは豊かな地域環境づくりとなる

③児童館に効く

児童館の運営がオープンになり風通しがよくなる

④児童厚生員に効く

人間関係調整力を高め、多様な価値

観と地域を知ることができる

⑤ボランティアに効く

ボランティア自身の自己成長と自己実現の機会となる

ボランティアにもさまざまな立場の人があつて、子どもたちに直接的にかかわる場合や児童館運営を側面支援する間接的なかかわりもあり、その参加パターンは多様です。児童館職員はボランティアと良い人間関係を保つよう心がけ、適材適所でその力が発揮されるよう努めなければならないでしょう。ボランティアが児童館のプログラムを支えることは、双方向のメリットがあり、子どもたちと地域をつなぐチャンスです。「ボランティアはいらない」ということは、もはや「地域に根ざしません」と公言するようなものなのかも知れません。

児童館におけるボランティア参加の有無状況



昭和59年 「児童館の社会的機能に関する調査」
(社団法人全国児童館連合会)
平成8年 「全国児童館実態調査」(社団法人全国児童館連合会)
平成14年 「児童館ボランティア実態調査」
(財団法人児童育成協会)

ボランティア活動の種類

個人参加

特別な技能や目的を持った人

内容にかかわらず社会参加したい人

子ども、学生、主婦、社会人、保護者、高齢者など

組織連携

児童館運営委員会、母親クラブ、子ども会、学校、民生・児童委員会、NPO、大学・短大・専門学校、サークルなど

参考文献

- 「児童館と地域の児童健全育成活動」社団法人 全国児童館連合会(昭和60年)
- 「児童館110番」社団法人 全国児童館連合会(平成2年)
- 「全国児童館実態調査報告書」社団法人 全国児童館連合会(平成9年)
- 「児童厚生員ハンドブック(改訂版)」財団法人 児童健全育成推進財団(平成12年)
- 「児童健全育成ハンドブック」中央法規(平成14年)

特別寄稿2「ボランティア活動の魅力」

児童館でボランティア活動を受け入れ (大型児童館の立場で)

神戸市総合児童センターでは、学生を中心にボランティア活動をしています。活動内容は、デイリープログラムでの子どもの遊び相手や指導、ルームイベント・センターイベントの補助、ボランティアの自主企画とさまざまな活動形態があります。ボランティアの自主企画ではナイトハイク、アウトドア、お化け屋敷、クリスマスイベントなど魅力的なものをみんなで企画し、準備をしていきます。最近の良い形態に、職員とボランティアが頭をつきあわせ、一緒に企画する事業も年に数回あります。打ち合わせや準備のための日程調整など大変なこともありますが、職員だけではなくなかなか手がつけられないことも(例えば、事前調べ、大がかりな準備、屋外活動)、ボランティアがいることで簡単にでき、新しい風や発想を吹き込み、活動の幅が大きく広がってきています。具体的な例としては、街に出て行うクイズラリーや大型ゲーム大会、大型造形遊びなどの活動を展開しています。

大型児童館は、地域児童館とくらべると常連と言われる子どもが少なく、たまたま遊びにきた一日限りの来館者が多いため、子ども同士やボランティアと子ども個人とのつながりも弱くなっています。子ども一

人ひとりへの声かけやフォローは職員だけでは限界がありますが、ボランティアが入っていることで、そういった問題も少しは解消することができます。設備などのハード面だけが魅力的な大型児童館でなく、ソフト面でも「遊びに行きたい」と言われるような施設にしてみたいと思います。ボランティアの効果は数字では言い表すことはできませんが、効果はあると実感しています。当センターの活動でお勧めしたいものに、行事のない空いているホールを使っての集団遊びがあります。この時間は、子どもたちが力いっぱい体当たりできる魅力的空間に変わります。子どもと一緒にになっておもいっきり走り回る学生ボランティアの姿はとても力強く感じます。その他にも大型児童館では、音楽や造形など専門的活動もあるので、音楽が好き、作ることが好きといった得意なものや特技を生かした活動があり、活動補助として有効な役割を果たしていると言えます。

現在のような財政・予算の厳しい時代、少なくなった予算の中でいかに事業を開拓していくのか、日々職員間でも知恵や工夫を出しあっています。そういった知恵や工夫も、ボランティアがいることでさらに幅



久保 和功 (くぼ かずのり)

神戸市社会福祉協議会に勤務。現在、神戸市総合児童センター運営課課長(神戸市子ども会連合会事務局長)。平成3~6年度 神戸市総合児童センターにてセンターボランティアを担当。震災後は、ボランティア情報センターに勤務、福祉教育・企業労組の社会貢献活動、福祉の啓発活動の担当。平成13年より課長として現在に至る。子ども会、ボランティア活動の育成を日々奮闘中。

る有効性について

神戸市総合児童センター
久保 和功

が広がります。もちろん労力的な部分での貢献も大です。学生に募集をかけても以前ほどたくさん集まる時代ではありませんが、できるだけ多くの学生を集めるよう多数の近隣大学に声をかけ募集しています。養成には手間と時間を要します。また、大きな力にしていくためには、仲間づくりから始めてかなければなりません。共同作業を何度も積み重ねていく度に大きな力になっていきます。そのために、ホールを使った大型イベント、アウトドア系などの魅力的なプログラムの企画は、ボランティア自身で考え、作ることができるような場面をできるだけ多く与えるようにしています。

神戸市の場合、だいたい中学校区に1つ地域児童館があります。約100館ほどの地域児童館があり、そこへのボランティア派遣、出張活動を昨年より展開しています。ボランティアが大型児童館と地域児童館、児童館と児童館を結ぶパイプ役、遊びを伝え広げる活性剤となるよう期待しています。大型児童館で行った活動を地域児童館で実践したり、児童館で流行っている遊びを大型児童館で大きいスケールに変えていったりとさまざまな活動が展開できます。今はまだ試行段階ですが、最

近では「ゆうびんやさんごっこ」という行事で、2つの児童館で手紙などのやりとりをした例もあります。子どもの遊び・児童館活動の発展のためにもボランティア活動や交流活動はとても重要です。今回の事業の一環として行った「じよいんフェスティバル」も大型児童館ボランティア同士の交流ということで、意味や可能性がすごくあったのではないかと思います。児童館ボランティアは遊びをつなげ、広げる役として大型・小型・地域を飛び越え、相互に児童館活動の活性剤として役割を果たすものになるのではないかと期待しています。

今後は世代、活動内容の幅をも広げ、地域児童館のボランティアも視野に入れ、幅広いボランティアの育成、活躍の場の開拓を大型児童センターとして進めたいと考えています。

ボランティアの受け入れへのステップ

募集のしかた 受付方法

地域の中で子どもを育む児童館活動に、幅広い世代のボランティアが参加することで、子どもたちのプログラム活動が豊かになったり、さまざまな人が関わることにより子どもが豊かな人間関係を育む機会にも恵まれます。

今回の調査では児童館活動のボランティアの参加状況は、約7割の施設で何らかの活動に参加していると回答しました。こうした状況の中で、「どうしたらボランティアに集まつてもらえるか」、「どんな研修や打合せが必要か」、また、ボランティアの活動メニューや、参加への流れ、ボランティアが参加しやすい環境作りをどのように考えたらよいかなど、「ボランティアの受け入れ方法」について、知りたいという声が多くありました。

そこで、ボランティアの募集から活動への参加、そして、活動後のアフターケアについて、初めて活動に参加するボランティアを想定して『活動の流れ』を考えてみます。

また、ボランティアが心地よく児童館で活動をすすめるための環境整備について、職員が知っておきたいこともまとめてみました。実際に使われている資料も掲載していますので、地域や施設の規模に応じて、アレンジしたり、参考にして下さい。

まず最初に児童館がボランティアを求めていることを、地域の人たちに知つてもらう必要があります。

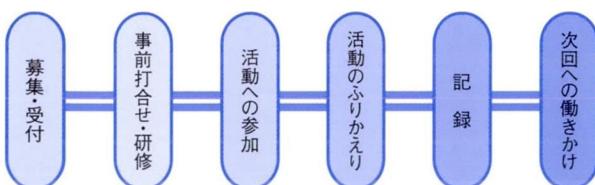
「ボランティア募集」の広報手段として、「ポスター掲示」、「パンフレット作成」、「児童館だより」や「市報」に掲載などがあります。より広く、さまざまな人に集まつてほしい場合は、どの範囲に広報をするかも大切なポイントです。自治会掲示板、ボランティアセンター、近くの学校や大学などは比較的協力を得られることが多いようです。また、新聞や地方情報誌などへの依頼も可能です。近年はインターネットを使って情報を求める人も多くなっていますので、ホームページを利用して募集をすることも考えられます。

また、必要な時に、「口コミが一番」という記述が今回の調査でも多くありました。日頃より地域の人たちとの連携をもち、ここぞという時に声をかけられるネットワークがあることも地域の児童館ならではの募集方法です。ただ、これだけでは「お願い型」になつてしまい、「言いたいことが言いにくい」土壤を生み出すこともあるようです。「新しい風」を施設に運ぶ存在として、風通しのよい人間関係をつくっていくためには、定期的に「新しいボランティア」の存在を考えてみてはいかがでしょうか。

次に、「どんなボランティアを求めているか」募集内容が、具体的にわかることが大切です。広報する媒体によって、その情報量もかわりますが、最低限「日時」、「場所」、「活動内容」、「募集人数」、「必要とされる参加の条件(研修・打合せの参加または必要とされる技能・技術)」、「実費弁償の範囲(謝礼等)」、逆に「参加にかかる費用負担」などが必要です。活動に関心のある人たちにとって、自分の都合にあわせて活動を選び、参加しやすくなります。また最初に諸条件を明らかにしておくことで、ボランティアも納得をして活動でき、職員との関係もうまく築きやすくなります。

「児童館ってどんなところだろう?」と、意外に知らない人も多いことが現状です。調査においても「児童館のことをもっと知つてもらうこと」が児童館でのボランティア活動が広がる要因になるという回答が多かったことが印象的です。「児童館はこんな活動をしている施設です」という内容を加えることで、よ

活動の流れ



り一層、ボランティアが児童館の活動に興味を持って参加できるのではないかでしょうか。

募集に対して、申し込み手続きは、どのように行われているでしょうか?「受付」のための用紙を作成し、参加するボランティアがどのような人かを把握することも、子どもの安全を守る専門職として大切なことです。「氏名」、「連絡先」は最低条件として、活動内容に応じて「年齢」や「特技・技能」などを確認することもあります。これらを「受付票」として適時職員が記入、または、ボランティア自身に記入してもらう「受付用紙」を用意しておくと、手続きがしやすくなります。登録制の形をとるボランティア募集の場合は、「登録簿」などをあらかじめ用意しておくと、メンバーの把握が容易です。単に連絡先の記入のみでなく、ボランティアの人となりを自己アピールできる欄(例えば、自己紹介や、趣味・活動できる時間・曜日、ボランティアの参加動機等)があると、プログラム活動にあわせてボランティアに声をかけやすく、適材適所に人材を生かすことができます。

参考までに、受付時に使用する「ボランティア登録簿」などの書式を転載しました。

また、未成年者が参加をする時は「保護者の同意」を得ているかどうかも聞いてみましょう。ボランティア活動は自由意志



のもとに行われるもので、たとえ子どもであっても本人の意志が大切です。しかし、家族の理解が得られず社会参加の活動をすると、「ボランティア活動ばかりして勉強をしない」などと保護者からの苦情で、本人が活動を続けにくい状況になることもあります。こうした活動が児童の健全育成活動の1つであることを理解していただくもう機会として、子どもの参加活動の場合、家庭にむけて活動内容を理解してもらう文書を送付したり、家庭での理解があるかどうか、本人に聞くこともよいと思います。

ボランティア登録簿

ふりがな	性別	生年月日
氏名	男・女	19 年 月 日生
現住所	〒	TEL ()
所属	学校 年	職場名
緊急連絡先	〒	TEL ()
活動希望日・時間帯	()曜日・午前()午後()	
活動回数	週に()回程度・月に()回程度・その他()	
希望の動機		

ボランティア・プロフィール

自己アピール		
趣味・特技		
やってみたい活動		
ボランティアの経験?※活動経験のある方は、具体的に内容を記入して下さい。 1.ない 2.ある()		
視力	右()左()	眼鏡使用・コンタクト使用
血液型		アレルギー ない・ある()
既往症		
体力	1.自信がある 2.やや自信がある 3.ふつう 4.やや自信がない 5.自信がない	
下記のうち、あてはまるものに○印をつけてください。		
()頭痛になりやすい ()風邪をひきやすい ()耳が聞こえにくい ()鼻が悪い ()気管支が弱い ()腰痛がある ()心臓が悪い ()胃が悪い ()肝臓が悪い ()腎臓が悪い ()その他()		

ボランティアの受け入れへのステップ

事前打ち合わせ・ ボランティアに対する研修

活動前に一度ボランティアと会い、当日の流れや内容について打ち合わせを行います。内容によっては、実施当日以前に、また簡単な活動であれば、活動日の時間前に打ち合わせを実施します。プログラムの目的をきちんと伝え、ボランティアに理解を得て活動に入つてもらうことは、ボランティア、職員相互によい関係を築き、共に活動をすすめる上で大切です。「何をしていいかわからない」では、ボランティアも活動できません。また、困った時にどの職員に相談したらよいか知っておくためにも、一度面識があるとよいでしょう。

事前打ち合わせの内容として、「児童館の役割・使命」、「職員の紹介」、「一緒に参加するボランティアとの自己紹介」などを行い、お互いに人間関係を作る機会があります。

その次に活動に関する内容を説明します。「集合時間」、「集合場所」、「持ち物」、「服装」、「活動時間がどのくらいか」、「プログラムの目的」、「活動内容」などがあります。特に、社会経験の少ない生徒・学生が参加する場合、集合時間を厳守するなど、他の人の関係性を大切に考えるように伝えることは必須です。また逆に、その時点でボランティア自身が不安なことがないか、聞いてみることも大事です。一方的に職員が、必要事項を確認するだけの事前説明にならないよう、あくまでも参加するボランティアが気持ちよく、不安なく、しかも活動に期待がもてるよう話をすることが求められます。

また、謝礼などをボランティアに支給できる場合はその旨を話します。逆にそれができない場合も、この時点で明らかにし了解を得ておくこといいでしょう。こういったことはうやむやにせず、児童館として「できること」、「できないこと」は、理由を明らかにしボランティアに説明をしましょう。

こうした打ち合わせ以外に、当日のプログラムに向けて準備活動や、研修を必要とする場合があります。例えば、造形活動

の場合、当日制作するものを実際に作ってみて、ポイントなどを熟知しておくこと、キャンプなどの野外活動では、野外炊事の仕方やテントの張り方、当日のゲームなどの練習が必要です。こうした研修については、プログラムに合わせて実施することができますが、その都度、実施することが難しい場合、年数回と決めて行う方法もあります。

事前に、ボランティアとゲーム内容などを計画し実施すると、職員だけでは生まれないアイデアが加わったり、今までとは違った内容を子どもたちに提示することもできます。プログラム活動によって、その目的をボランティアと確認しながら、一緒に準備活動をすることも活動のメニューを広げるきっかけとなるでしょう。

いずれにしても、ボランティアが安心して活動に望めるように、事前の打ち合わせはしっかり行いましょう。



活動への参加

打ち合わせが終わると、いよいよ活動の始まりです。初めての場合、子どもにどう話しかけてよいか戸惑ったり、なかなか関係を作るきっかけがつかめないこともあります。あまり戸惑うようであれば、子どもへの関係づくりの橋渡しをしてあげることも必要です。「ボランティアの○○さんだよ。よろしくね」と、子どもたちに紹介すると、戸惑うことなく子どもに関わるきっかけができるようです。また、時々活動の様子を見守り、必要に応じて声をかけてみましょう。初めての時ほど、緊張してどうしてよいかわからず、かといって職員に聞くことも躊躇してしまうようです。「困ったことはないですか?」、「疲れませんか?」などの言葉かけは、緊張しているメンバーには心強いようです。

また、子どもとの活動に慣れている場合でも、ボランティア任せにせず、様子を見守ることも大切です。実際に経験の長いボランティアから、「本当にこんな感じの活動でいいのだろうか?と時々思うことがあります、側にいてちょっとでものぞいてもらうと安心する」と言われたことがあります。活動の場面を共有することで、後で行う「活動のふりかえり」において、ボランティアと子ども活動のあり方について検討する機会になります。いずれにしても、子どもたちにとってよりよい活動運営がされているか、確認することは専門職として必要です。

活動の ふりかえり

活動後に、ボランティアと意見交換をし、プログラム活動をふりかえる時間は、職員にとってもボランティアにとっても貴重な時間です。ボランティアは実際に活動に関わったことで、「子どもと一緒に遊べて楽しかった」という喜びから「けんかをした時どうしてよいか迷った」など、さまざまな気づきが生まれます。こうした意見交換を通して、子どもたちの様子を客観的に把握できたり、子どもへの対応のあり方について一緒に考える機会となります。この繰り返しが、ボランティア活動を続ける原動力となり、活動の質的向上につながり、よりよい子ども活動が築かれていきます。実施したプログラムのふりかえりも、次回の活動に向けて更なるステップとなり、子どもたちによりよいプログラムサービスの提供となります。職員だけの反省会のみならず、利用者の立場に近いボランティアの意見は、利用者のニーズを調査するといった大げさな形をとらなくても、身近な存在として児童館行事のあり方に意見を求めるのと同じくらい重要な声になります。

「活動のふりかえり」の時間がとれない場合や、堅苦しい形でなく実施したい時は、お茶などを飲みながら雑談をとおして、意見を求めてみる方法もあります。

「活動のふりかえり」は、次回の活動の紹介も含めて継続的に参加しやすい雰囲気を作り、職員とのよりよい人間関係を構築し、パートナーとしてのボランティアの存在を尊重するためにも、職員、ボランティア、そして子どもにも有意義なものといえます。

ボランティアの受け入れへのステップ

活動の記録

ボランティア活動の記録は、どのように残したらよいでしょうか？

業務日誌に、人数・簡単な内容を記録する手段がありますが、具体的な内容や、実施後の感想をボランティア自身に記録してもらうために、「ボランティア活動日誌」など記録書式を用意しておく方法があります。活動の中で、何か感じたこと、嬉しかったことや子どもへの対応で困ったことなど、ボランティアには活動による「気づき」が生まれます。反省会の場で意見を言って問題解決をすることも大切ですが、そのような意見を記録に残すことは、ボランティア活動の成果を記録し、プログラム活動をよりよいものにしてく大事な資料となります。また、活動後にすぐ反省会や意見を聞く時間がもてない時、記録に書いてもらうことで、後でボランティアの気持ちを知る機会ともなります。

書式の項目としては、「活動名」、「日時」、「活動内容」、「反省会参加者」、「感想」などあげられます。「子どもの参加人數や様子」を記すこともできますが、あまり項目が多くなると、時間もかかりボランティアも負担になります。

また、こうした書式でなく既成のノートに、自由に意見を書いてもらう方法もあります。ただし、自由に書ける分、何を書いてよいか分からず書きにくかったり、ボランティアの主観的な記述が多く、プログラム記録として不明瞭になる場合もあります。ただし、このようなノートの記録は、ボランティア同志の情報交換としては効果的なようです。

調査結果でも、ボランティアからの悩み相談で「子どもの対応」について聞かれたというのが多く見受けられました。子どもや状況によっても対応の仕方は違ってきますが、こうした記録を残しておくことで、同様の事例があった時、「過去の先輩はこんなふうにしていた」ということや「みんな同じように悩んでいたんだ」という状況を理解することでも、活動に対する共感が生まれると思います。

記録用紙を参考に添付しますが、実際に使用するボランティアの意見も取り入れ、書きやすい記録を作ることをおすすめします。

個人活動記録			
登録番号		氏名	
活動日	活動内容	活動時間	担当確認欄
月 日		： ~ :	
月 日		： ~ :	
月 日		： ~ :	
月 日		： ~ :	
月 日		： ~ :	

活動記録・反省会記録		
司会	記録者	年月日
活動参加		
反省会参加者		
活動内容記録欄（プログラム・レシピ等がある場合は添付）		
反省会記録欄（反省・今後への課題・疑問事項等）		
スタッフ記入欄		
引き継ぎ事項・特記事項		

活動準備記録			
会合名	年月日	時間	～
参加者			
使用場所	使用物品		
打ち合わせ内容			
作業の状況			
次回の予定	年月日	時間	～
	参加予定者		
	打ち合わせ内容		
	使用物品		

ボランティアが活動しやすい環境を考える

ボランティアが児童館へ来た時、荷物置き場や打ち合わせの場所、活動後に座ることができる位置などは確保されていますか？ボランティア室があると、ボランティアが集う場ができる、準備や打ち合わせをしたり、ボランティアの荷物や、活動準備物、記録を保管する場所をつくることができます。活動後にゆっくりお茶を飲んだり、くつろげる場があるので、ボランティア同志のつながりを持ったり、ミーティングなどを開いて、活動の基盤をつくる雰囲気もできます。小型児童館でそういった場所が確保できない場合は、最低でも荷物を置く場所、着替えるところ、座れる場所（お茶や食事をしていい場所）などを決めておくとよいでしょう。

登録制のボランティアが、児童館との個人的な契約で結ばれるだけでなく、横につながりを持ってボランティアグループとして児童館に関わると、こういった部屋を基盤に、グループ活動が展開しやすくなります。集って企画や準備活動をしたり、ボランティア同志の情報伝達手段として、「通信」づくりをするといった活動や、親睦会を計画し、ボランティア同志、職員との交流を図る、また、今後の活動計画や、仲間同士で自己研鑽する研修を考えるという動きに発展することもあります。

もちろん、部屋を作っただけでボランティア同志の関係が自然と密になるとは限りません。職員のグループ活動への働きかけは必要となるでしょう。また、こうした場の確保は、施設がボランティアを大切な存在として認知してくれているとボランティアが受けとめることで、職員とボランティアのよりよい関係づくりにも役立つようです。



特別寄稿3 「ボランティアの受け入れ」

ボランティアがやってきた!

1 はじめてまして

あなたの児童館や児童クラブでは、ボランティアは活躍していますか？ボランティアを始めようとする人にとって児童館や児童クラブはさまざまな活動の可能性にあふれている魅力的なフィールドなのではないでしょうか？

ちょっと考えても、子どもたちとの日常的な関わりから始まって、行事のサポート役、一歩進んで技術提供による行事（教室）を主催したり、地味ながらも重要な施設の維持・管理や補修といったことまで、実に幅広い、そして本当に助かる活躍の場面が考えられます。

さあ、あなたの施設にボランティアがやってきました。これから気持ちよく活動してもらうために確認しておかなくてはいけないポイントをチェックしておきましょう。

2 基本の“き”

ボランティアを始める人に、児童館や児童クラブが必ず伝えて、理解しておいてもらわなければいけない事があります。それは、施設の運営目的と基本方針です。その施設が誰のために、何を目的として設置されているか、そして、どんな方針に基づいて運営しているかを理解した上で活動を始めることが何より重要です。目的や方針は施設によって違いがあると思います。また、そのままではわかりにくい（難しい）場合もあるでしょう。そんな時は、施設の目的や子

どもに接する時の基本的な考え方を平易な文章で、あらかじめ用意しておくと良いと思います。

3 職員がバラバラ？そりやダメだ

ボランティアを最も戸惑わせるのは、職員によって指示が違うことです。

職員間の事前の打ち合わせや、意思の疎通がしっかりとできていないことが原因です。聞きたびに違う答えが返ってくるようでは職員に対する信頼を失うことになります。そして、そんなことが繰り返されれば、ボランティアはきっと、大切なことでも自分で判断をするようになってしましてしまうでしょう。どんな小さなことでも職員間で統一されている自信がないときは、自分で判断せずに、必ず他の職員と相談してから指示を出すようにしましょう。「職員とボランティア」以前に、「職員同士」のコミュニケーションが大切なのはもちろんのことです。あなたの施設は大丈夫ですか？

4 「リスク」も一緒にやってくる

ボランティアは必ずしも「善意」だけを持っててくれるわけではありません。児童館の中でボランティアが盗難や性犯罪に関わっていた例は少なくありません。私たち職員はこうした最悪の事態が実在することをよく認識しておく必要があります。では、どうしたら最悪の事態を防げるのでしょうか？



千葉 雅人（ちば まさと）

中野区立宮の台児童館職員。船とランニングと動物フィギュアを愛する40歳の怪しいおじさんです。現在、来年5月開催の第6回全国児童館児童クラブ東京大会実行委員長として奮闘中。

中野区立宮の台児童館
千葉 雅人

①受け入れ時のチェック

職員の真価を問われる瞬間です。とはいっても個人の能力だけに頼るわけにはいきません。チェックマニュアルを作つておいて、ボランティア希望者の資質や性格を判断できるようにしておきましょう。チェック項目としては、趣味・特技・性格の自己判断・ボランティアとしてやりたいこと・どのような年齢層を主な対象としたいか、などが判断基準として有効だと思います。

②時間において熱意をチェック

受け入れ時のチェックと共に有効なのが、ボランティア開始まで一定期間を空けるようにすることです。一時の思いでボランティアをやろうと燃えていても、時間を置くと自分の気持ちがそれほどのものではなかつたと気づく人が多いようです。同じように、「悪意」を持ってやって来る人に対しても一定の歯止めになるのではないかでしょうか。

③活動中のチェック

ボランティア活動者を監視するような目で見ることには抵抗があると思います。しかし、利用者の安全を守るのは私たちの最も重要な使命です。一定の信頼関係ができるまでは注意を払うべきでしょう。職員以外が手を触れてはいけないものや、入ってはいけない場所に近づくような行動については必ず指摘しましょう。また、子どもに対して不自然な身体的接触をしている様子を見かけた時もすぐに注意をし、そうした行動を取らないように指導する必要があります。

5 ボランティアの自立を目指して

前項ではボランティアに関する「負」のイメージを強調しましたが、もちろん児童館にとってボランティアは、児童館の活動を幅広く豊かなものにしてくれる貴重な存在です。職員の手足として使つたり、職員の穴埋めをしてくれる便利な存在思つていい方はいませんよね?

子どもたちは、日常接する職員とは違うさまざまな大人や青年が児童館に入り出すことで、家庭や学校では味わえない貴重な体験をします。私たち職員は、その意味を十分に理解してボランティア活動者を受け入れなければなりません。受け入れのときの慎重さとは裏腹に、ある段階からは活動者の自立を目指線に入れた突き放した対応が必要になります。

この段階こそ職員の力量が問われ、また、発揮される時だと思います。ともすれば職員のお膳立ての上に乗せたままの関係を望みがちですが、そのやり方では職員の能力を超えた自発的な活動には対応できないばかりでなく、新しい発想を受け止められません。私たち職員は、ボランティア活動者が児童館の活動目的を理解した上で、より自立した、自発的な活動を展開することを目標とし、応援していくなければいけません。そのような活動が定着していくことによって、児童館は本当の意味での地域施設になっていくのではないかでしょうか。

ボランティアに理解してもらいたい基本的な考え方の例

- ① 子どもたちが自由にのびのびと遊べるように援助します。
- ② 子どもの自主性を大切にして、子ども同士で遊びを展開できるように援助します。
- ③ 子どもたちに他人への思いやりや気配りの大切さを伝え、誰もが楽しくすごせる場にするよう指導します。
- ④ すべての利用者が安全に、安心してすごせる場になるよう指導します。
- ⑤ ルール違反や危険なことをした子どもを見かけたら、必ず注意します。

特別寄稿4 「ボランティアの受け入れ」

ボランティアの養成

ハンズ・オン プランニング代表
染川 香澄

有給無給に関わらず、人を相手にする活動で最も大切なのは、その相手の立場に立てるかどうかに尽きます。児童館でのボランティア活動に関して、サービスを受ける子どもの立場をきちんと想像できたとき、初めて見えてくるものがたくさんあるはずです。そうすることで、子どもの対応の仕方もおのずと考えることができるようになるでしょう。

そんなボランティアを養成するためには、次のようなことが考えられます。

- ①児童館がどういうところであるかを認識してもらう
- ②ボランティアとして関わってもらう予定のイベントや活動のめざすところについての説明をする
- ③約束事の確認は、ボランティアの主体性についての意識醸成のためにワークショップ形式を採用する
- ④一般的なボランティア論の学習
- ⑤相手の立場に立つためのトレーニング

①と②については必要不可欠の前提条件となります。③に関してはボランティアの主体性を育むことを目的にワークショップを採用するというものです。活動への関わり方（時間を守る、態度、服装）など館側が押し着せるのではなく、円滑に実施するにはどのような約束事が必要かをお

互いに出し合うのです。④では講義のあとに講師とともにその館としてのボランティアの位置づけを話し合う時間を設けると有効です。⑤がもっとも重要で、どのように子どもと向き合うかを身をもって理解できるよう考えたいところです。

米国の子どもの博物館で、展示場で子どもの遊びと学びを引き出す仕事をするための養成講座を受けたことがあります。講座では子どもの目の高さで考えることを繰り返し学びました。4歳児までが遊べる幼稚室では、実際に膝を曲げ、すねのところで這うように歩くことを求められました。すると物理的に目の高さが4歳児ぐらいまで下がり、それまでは気づかなかった低い位置に絵が飾られ、おもちゃが取り付けてあることを知ったのです。また、来館中の大人にぶつかられました。母親とデパートに行ったときに、大人にぶつかられてここは自分の居場所でないと嫌な思いをした子ども時代の経験と同じことが起きたのです。大人は大人の目の高さだけで行動しがちで、狭いところや混雑しているところでは背の低い子どもの存在に気づかなくてぶつかることが多いのだと、今さらながらに納得したものです。

科学の展示室では、子どもに質問するときは「これはなに?」ではなく「これはなん

だと思う?」と聞えば子どもの答えはすべて正解になる。間違っていると否定するのではなくて、答えを肯定しながら、子どもが自ら答えを解いていくように引き出して上げて欲しいといわれました。子どもたちに寄り添うことが大切なのです。

このように、子どもに何かをさせるのではなく、子どもが自分でできるようなサポートを作り出せるボランティアを育てることができれば一つの到達点ではないでしょうか。小規模で独自の養成講座が実施できないところは、公的な団体などが主催するボランティア講座等の受講を勧めたり、タイアップする、あるいは近隣の児童館等との共催なども考えられます。予算のない場合は関連する助成金がないかを調べたり、この際自前で挑戦するのもいいでしょう。準備の過程で外とのネットワークも広がるし、館のボランティア観も確立していくことが期待できます。

いずれにしても、他館の優れた例に謙虚に学ぶことが最大の近道となるでしょう。

染川 香澄(そめかわ かすみ)

司書として、子どもの図書館で10年間勤務したのち、米国の複数の子どもの博物館でインターンをしながら博物館教育を学ぶ。人は楽しんでいるときこそ多くを学ぶという信念のもと、全国の歴史系博物館や水族館などのさまざまな文化施設で、子どもを中心とした家族が楽しく利用できるための展示アドバイスやスタッフ養成、利用者調査など、幅広い仕事に取り組んでいる。『ハンズ・オンは楽しい』(工作舎)共著、『ハンズ・オンとこれからの博物館』(東海大学出版会)共訳ほか。

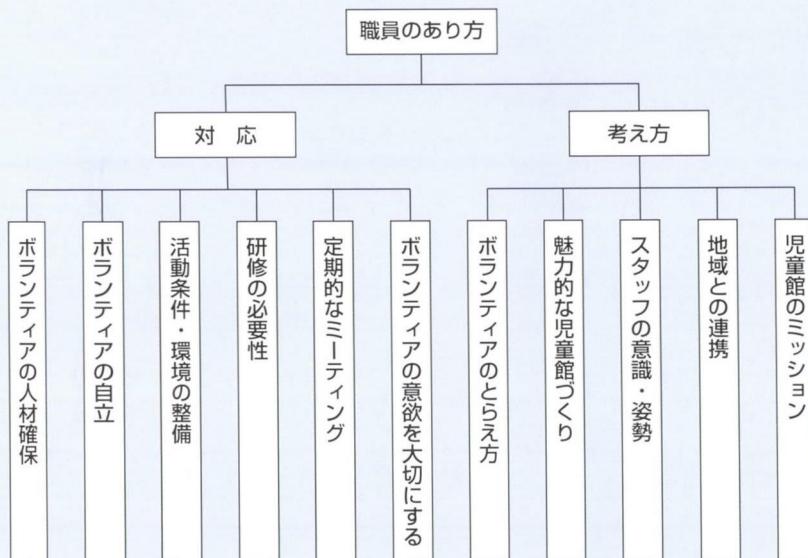


ボランティア活動活性化のポイント

職員の考え方と 対応力が大切

児童館におけるボランティア活動が、子どもにとっても、ボランティアにとっても、そして、施設や職員にとっても、楽しく、有意義で、充実したものになるために、私たちスタッフはどう働きかけたら良いのでしょうか。

多くのアンケートに、ボランティア活動を活性化させるためのさまざまなポイントが寄せられました。それをまとめ、専門委員会で分析したところ次のような図式が表されました。



全国の児童館スタッフが日頃の実践の中から、見つけ出した活性化のポイントをまとめるところなりました。なんといっても、「職員のボランティア活動に対する考え方や、その対応が大切!」ということです。ボランティア活動を活性化させるためには、職員のあり方が問われるのです。

『考え方』とは、地域での児童健全育成事業全体を見据えたうえで、児童館におけるボランティア活動をどう考えていくかという理念や哲学ということです。『対応』とは、その理念や哲学に基づいた、ボランティアへの具体的な接し方や、働きかけということです。以降に、それぞれの項目の具体的な内容を紹介していきます。日ごろからみなさんが実行していらっしゃる事がたくさんあると思います。ぜひそれを確認して見て下さい。そして「うん、これでいいんだな。自信持ってやってみよう」と考えていただけたらと思います。「わーこんなにやらなければならないのか…」と思ってしまうと、いつまでも前に進みません。『できる事から少しずつ、でも、夢は大きく』こうありたいですね。

ボランティアへの対応①

1

『ボランティアの意欲を大切に』

ボランティア活動は、一人ひとりのボランティアの意欲によって支えられています。誰からも束縛されない自由意思に基づくこの活動は、なによりも意欲的に行われるのが理想といえるでしょう。しかし、きっかけは意欲的であっても、人との相互関係において成り立っているボランティア活動には、当然さまざまな障害があらわれてきます。最初はそうした障害にも積極的に取り組んでいても、自分ひとりで解決できない問題などが出てくると、次第にその意欲は減退してきます。ボランティアが、いつまでも、意欲を持ち続ける事は決して簡単なことではありません。そこでスタッフの支援が必要になってきます。ボランティアが継続的に意欲を持って活動に取り組むために、スタッフはどう支援したらよいのでしょうか。

1 より良い人間関係づくり

ボランティアとスタッフとの良好な人間関係をめざしましょう。これは調査による活性化のポイントで一番件数の多かった要素です。活動の中で現れるさまざまな障害を、率直に相談できるスタッフがいる事は、ボランティアにとってとても心強いものです。「私ひとりじゃない、スタッフも一緒に支えてくれている」という確信は、人を前向きにします。そのための基盤となるのが、お互いに支え、支え合える良好な人間関係ということです。「職員やボランティア同士のコミュニケーション。互いの意見を出しやすい雰囲気づくり」、「人間関係を密にして、行事や事業を事前に連絡すること」、「お互いの気心あふれた交流」、「ボランティアの意義を相互に理解する」、「相互が刺激し合える信頼関係と多種多様な情報交換をしながら、成長の場となるよう」、「相互理解と互助精神」、「単なるお手伝いではなく、共に考え、仲間として認めること」等が具体的な方法としてあがっています。日頃からの情報交換、意見交換がより良い人間関係を築くきっかけとなるようです。そして、

忘れてはならないのが、「スタッフからの積極的な人間関係の促進」と「ボランティアと共に育つ」という姿勢のようです。

2 ボランティアを認める

意欲を持ち続けるためには、ボランティア自身が児童館やスタッフからまかされている、頼りにされている感じることも大切です。人間だれでもそうですが、人から認められているという実感は、その行動に勇気を与え、楽しく充実した行動につながります。とはいっても、ボランティアに何から何まですべてまかせて、ほったらかしにしている事は『認める』こととは違います。前述のように、日頃からのコミュニケーションを豊かにし、ボランティアがどう考え、何をしたいのかしっかり聞いておく必要があります。当然その中に、児童館が望まない活動も出てくるでしょう。そうした時にスタッフとボランティアがお互いに意見を言い合う事が大切です。ボランティアを『認める』ということは、彼らのやりたい事をすべて認めるのではなく、『ボランティアとして活動しようとしているその意思と人間性』を認めることと考えて良いでしょう。



ボランティアへの対応②

2

『定期的なミーティング』

人は、先の見通しが立てられる行動は、楽しく安心して取り組むことができます。ボランティアが児童館で活動する時に、見通しを持って活動してもらえば、継続的に創造性豊かな活動が生まれるでしょう。そのためには、次の事が重要になってきます。

1 年間計画の立案

ボランティアと共に、活動の年間計画をたててみましょう。活動を行うペース（週に1回?月に一回?定期的?不定期?）、時間は何時が良いのか、誰がくるのか?等ボランティアの考えや予定をあらかじめ聞いてみましょう。また同時に、児童館としていつ活動して欲しいのか、希望を伝えておきましょう。

また、子どもの状況や季節に合わせて、ボランティアのアイデアをいかしながら、プログラムを計画していくのも良いでしょう。年間計画をたてる事は、活動の目標と方法を明らかにし、魅力的に効果的なプログラムづくりのきっかけとなるでしょう。

2 事前打ち合わせとフィードバック

ボランティアが児童館で活動を始める前と、終わった時にミーティングを持ってみましょう。活動の始まりには、今日の目標や計画を確認し、スタッフとボランティア同士のコンセンサスをとるようにします。また、活動終了後には、「おつかれさま」「ありがとう」だけですませず、ボランティア自身の活動の振り返りを聞き、疑問や悩みに答えてあげましょう。そして、専門家の目から見て、良かった点や改善点をきちんと伝えることも大切です。その時、上から下へ向かって評価をするのではなく、「問題を共に解決していく」とする、スタッフの姿勢が重要です。

こうしたアプローチは、ボランティア自身の活動に勇気を与え、次へつながる発展的なボランティア活動を生みだ

すでしょう。もちろん、活動ごとが良いのですが、スタッフも忙しくて、なかなか時間が取れないのが現状です。その時は、業務の状況に合わせてその頻度を決めれば良いのです。重要なのは、濃くするという事です。

3 活動ニーズの調整

ボランティアはさまざまな希望を持って児童館を訪れます。「こんな事ができる」、「こんな事をやってみたい」、こんなふうに自分自身の可能性を發揮したいと、具体的な目標を持って訪れる人も少なくありません。それは、児童館にとって、素晴らしい財産といえます。しかし、児童館が「今、これしかできません」、「これをやって下さい、それ以外は結構です」「いろいろ面倒くさいと言わないで!」という態度では、せっかくの社会資源を活用しているとはいません。宝の持ち腐れです。ボランティアが何をやりたいと思っているのか、しっかりとニーズを把握し、そのニーズに対応できるボランティアメニューの多様化が必要になってきます。メニューはすべてスタッフがつくる必要がありません。ボランティアと共に少しづつ増やしていくべきなのです。ボランティアの力で、今までにないプログラムが児童館に増えることは、子どもにとって魅力的なことです。

でも、ここでスタッフが考えておかなければならないことがあります。ボランティアのやりたいことと、児童館、子どもが望むことがいつも『イコール』とは限らないという事です。ボランティアが「これをやりたい」と言っても、それが子どもたちに望まれていないことであったり、児童健全育成の理念から離れていたり、児童館の目標と違っていては困ります。スタッフは、熱意あふれるボランティアの希望を、なかなか断りにくいものです。しかし、『子どもの最善の利益』をめざす活動をいつも念頭に置く必要があります。独りよがりのボランティア活動は決して良い結果をもねきません。ボランティアのためにも、子どものためにも、理念と客観性に基づいた活動ニーズの調整が必要です。

ボランティアへの対応③

3

『ボランティア研修の必要性』

ボランティアが、児童館で活動をしようと思った時、その行動を支える背景はさまざまでしょう。たとえば、単に「子どもが好きだから」という人もいれば、「今の子どもはここが問題だ、なんとかしたい」と考えている人もいます。「将来、役に立ちそうだから」とか、「成績が良くなるから」という学生の人もいます。また、健全育成活動に対する考え方、子どもへの接し方、ボランティア活動に対する考え方、児童館事業に対する理解の度合いもさまざまです。いずれにしても「ボランティアをやろう」と自発的意思は持っているけれども、その考えを支える基盤は多様です。

こうした多様な基盤を持つボランティアがスタッフと共に、同じ施設でコンセンサスをとりながら、共同で事業を進めるはどう考えても難しいといえます。ボランティアが子どものためにも、施設のためにも、そしてボランティア自身のためにも、より良い活動を行うには、ボランティア同士、スタッフとボランティア同士の共通の基盤を研修においてつくる事はとても大切です。次に研修に必要な視点をまとめてみます。

1 ボランティアが自分の活動の社会的価値を理解する

ボランティア活動は社会に開かれた活動です。自分や自分の身の回りの人だけのための活動ではなく、公益性があるといわれています。ボランティア活動の社会的価値を理解する事は、独りよがりなボランティア活動を見直し、広い視野で活動を展開することが可能になります。「児童館が何をめざしているのか」、「児童健全育成とは」、「ボランティア活動の理念」等の学習科目を考えても良いでしょう。ボランティア意識の向上は、児童館におけるいきいきとしたボランティア活動を生み出すきっかけとなります。

2 子どもを理解する。 遊びの支援方法を理解する

児童館には、幅広い年齢層の子どもたちが訪れます。それぞれの発達によって好みも違うし、遊びも違います。子どもたちが「楽しい」、「良かった」と思える活動を行うためには、ボランティアが子どもを理解することが望ましいでしょう。また、昨今ますます深刻化する子どもの問題もあります。特に、遊びや地域活動を通してさまざまな人と触れ合う機会が極端に少なくなったといわれています。こうした子ども時代の人間関係の希薄化により、子どもが将来の社会生活で必要になる自己肯定感や対人関係能力を豊かにするチャンスを失っていると考えられます。『子どもと遊ぶ』といった、一見単純な活動内容も、こうした背景を基盤に多様な支援方法があると考えられます。多くのボランティアは子どもの健全育成の専門家ではありません。子どもの問題を的確に捉え、『共に遊ぶ』という行為を通して適切で豊かな子どもへのアプローチの方法を考える機会があると良いでしょう。こうした研修も、一方的にスタッフがボランティアに伝える講義形式をとるのではなく、ざっくばらんに話し合いながら行う参加型の学習形態をとると、より主体的で積極的な学びの機会ともなります。

ボランティアへの対応④

『活動環境、条件を整える』

ボランティアが活動しやすい環境や条件とはなんでしょう。児童館そのものの環境、すなわち、人的環境、物的環境、また地域を含めた社会的環境も含まれるでしょう。もちろん条件が整えば、整うほど良いのですが、スタッフがすべてお膳立てしてしまうと、ボランティアの自発性が失われるおそれがあります。ここでは、主にスタッフが行なつたほうが良いと考えられる視点を幾つかあげてみましょう。

1 ボランティアを受け入れ やすい雰囲気づくり

何よりも、ボランティアが児童館で活動してみようと思わないで話を始めません。そのためには、児童館にとってボランティアが必要な人材であることを伝えていく必要があるでしょう。「あそこで私は求められている」と感じることが、ボランティアをめざそうとしている人を動かしていくと考えても良いでしょう。

しかし、せっかく募集しても、ボランティアが全然集まらないことがあります。こんな場合「うちの地域は無関心なんだな」と、落胆とともに継続的な募集をあきらめてしまいがちです。でも『ボランティアの意義を地域にアピールしていく』という視点で、こうした広報活動を考えれば、すぐに効果がでなくても良いと思います。少しずつさざ波のように、児童館から地域へのメッセージが伝わっていけば良いのです。それは、ボランティア活動の社会的認知を得るという、地域福祉事業の重要な視点なのかもしれません。きっとそのさざ波は、いつか大きなうねりとなることを信じていきたいですね。

2 ボランティアの事故への対応、 責任についての明確化

ボランティアの活動しやすい条件の中で、事故への対応、責任をどう考えたら良いのかも、明確にしておいたほうが良いでしょう。ボランティア自身が活動している時に、対象

者に怪我をさせた場合、またボランティアが怪我をした場合、いったいボランティアはどうしたらよいのか、これはボランティアにとってとても心配なことです。大きな怪我の場合、誰が責任をとり、どう補償するかは、非常に複雑な問題です。「この場合はこう」と、明確な答えはなかなか出せないのが現状でしょう。少なくとも、ボランティアが児童館で活動している最中に大きな事故がおこらないよう、日頃からボランティアと共に活動に対する安全管理をしっかりと行い、事故防止に努めることが必要だと考えます。それから「もし事故がおこった時どうしたらよいか」事故後すぐの対応についてルールを決めておき、スムーズな事故処理が行えるよう心掛けておきましょう。

また、ボランティア自身が『ボランティア保険』に加入しておく必要があります。これは上記のような、怪我をさせた場合、怪我をした場合にある程度の補償があります。ボランティア保険の加入方法は地域のボランティアセンターに問い合わせると教えてくれます。

3 ボランティアルーム、 拠点があること

児童館にボランティアの居場所をつくってみましょう。休憩したりミーティングをしたり、ボランティアのための空間です。特別な部屋が用意できなければ、パーテーションで囲んだ中に、イスとテーブルがあるだけでもかまいません。ボランティアルームを用意するということは、単に休憩できるという理由だけでなく、ボランティア同士の人間関係を深める事にもつながります。ボランティアルームで交わされるちょっとした会話の中に、お互いを助け合う相互援助機能が生まれてきます。また、さまざまなアイデアを組み合わせ創造豊かなボランティアプログラムを生み出すきっかけにもなります。なによりも、空間、時間を共有することは、ボランティアのグループ意識を育て、児童館への帰属意識を高めることにつながると考えられます。

ボランティアへの対応⑤

5

『ボランティア自身の自立』

ボランティア活動はボランティア自身の自発的な意思によって支えられています。「自分でやろうと思った事を、自分の力でやる」ということですから、ボランティア一人ひとりは自立した存在と考えても良いわけです。しかし、現実はなかなかそうではないようです。特に、中学生や高校、大学生といった少年期、青年期の若者たちは、ボランティアをやりたいと思っていても、まだまだスタッフや児童館に依存的であるのは当然と考えられます。小さい頃から児童館にかよっていた子どもが、大きくなってその児童館でボランティアをやる場合はなおさらです。子どもの頃からのスタッフとの関係を引きずっているわけですから。若いボランティアが増えて、スタッフでは出せない活気あふれるプログラムが展開されても、裏でスタッフが手取り足取りお膳立てしていくは、ボランティアの持つさまざまな可能性を最大限に引き出しているとはいえないでしょう。また自立心に欠けているボランティアは、自分の行った活動に対する責任感にも欠けることが多いようです。『約束していたのに、突然休むボランティア』、『プログラムがうまくいっていないのに、改善しようとしてないボランティア』、『何でもスタッフに要求するボランティア』などは、自立心に欠けていると考えられます。『ボランティア自身の自立』を促すためにスタッフはどう働きかけたらよいのでしょうか。

1 ボランティアの組織化

組織化というととてもおおげさな感じがしますが、会長や副会長等の役割を決め、規約をつくるということではありません。グループ中でおこるさまざまな相互作用を活用してボランティア活動の活性化を図るのです。みなさんもご存じのように、人間がグループを形成し、ある目的を持って活動すると、そこに所属している個人の成長、そしてグループそのものの成長が期待されます。お互いの悩みを分かち合い、相互に支えうことによって、ひとりでは解決

できない問題を解決する糸口が見つけられることがあります。また、お互いの持っている情報を提供しあい、学びあうことによって創造性豊かなプログラムを生み出すこともできます。そしてこうした様々な個人、グループに及ぼす効果が、ボランティア自身の意識や活動姿勢を少しづつ改変させていきます。

2 ボランティア組織化のポイント

ボランティアの組織化はどう進めていけばよいのでしょうか。まず、ボランティアの中で日頃から熱心に活動している、リーダー的な人に声をかけ、相談するところから始めるといいかもしれません。活動人数が多い場合は、活動内容や、曜日ごとに小グループをつくり、その中にリーダーを見つけるのがよいと思います。そして「ボランティア活動活性化のためにスタッフはこう考えている」と考えを伝え、ボランティアの意見を聞いてみると良いでしょう。あまり強引に進めるとボランティアから「スタッフの都合のよいように進めている」と誤解されることがありますから、慎重にゆっくりと進めたほうがよいでしょう。スタッフはリーダーと連絡を取り合いながら、グループの活性化を図っていきますが、リーダーにまかせきりにするのではなく、『グループワーカー』としての視点を持って、継続的にグループを支援していくことが大切です。

ボランティアへの対応 ⑥

6

『ボランティアの人材確保』

ボランティア活動を行っている人が陥りがちな問題点の一つとして『たこつぼ化現象』があるといわれています。

『たこつぼ化現象』とは、自分の行っている活動に非常に熱心に取り組んではいても、それだけに自分の目の前のことしか見えなくなってしまう。『たこつぼ』の中にいるたこのように、外界からの刺激をまったく受けない状態になってしまふということです。結果的に自己満足で発展のない活動に終始してしまう可能性があります。また、ボランティアが何かプログラムを企画しても、いつも人手不足ではボランティアにかかるストレスが多くなります。恒常にこのストレスが続くと、次第に意欲が減退するおそれもあります。ボランティアの人材を確保することは継続的で幅広いボランティア活動を推進するための重要なポイントと考えられるでしょう。

1 継続的な募集

ボランティアの人材を確保するための視点のひとつとして、継続的に募集を続けることがあげられると思います。ボランティアの人数が多いときは、スタッフやボランティアには危機感があまりありません。しかし、なんらかの事情でボランティアがやめていき、人数が少なくなった時初めて危機感を覚えるものです。しかしそこからあわてて募集をしても、思ったように人数が集まらない事のほうが多いようです。結局そうしているうちにボランティアグループの存続が難しくなります。つまり、人数が多く、みんなが余裕を持って活動している時のほうが、新しいメンバーが入りやすいし、逆に少人数でせっぱつまってやっている時は、グループのムードも悪く、人が入って来にくいようです。グループが安定している状態の時から、常に新しい人材を発掘していくことを心掛けましょう。

2 幅広い年齢層の受け入れ

人材確保のもう一つの視点は、さまざまな世代のボランティアを受け入れるということが考えられます。ボランティアは多様であることが魅力です。そういう視点から考えると、さまざまな世代がボランティア活動にかかわることは、世代に応じた遊びの知識、技能の幅が広がります。また世代に応じた子どもへの対応のしかたもありますから、それも大変魅力的です。しかし、これだけいろんな考え方を持った人が集まると、まとまる物もまとまらなくなるのが現状です。ですからスタッフもつい同じ世代のボランティアが活動することに安心感を求めてしまいます。コンセンサスをとることは大変かと思いますが、その話し合いや、共同での活動空間の中で、ボランティアやスタッフに発見や気づきがあると考えたいと思います。



ボランティアの考え方①

1

『ボランティアの捉え方』

児童館で活動するボランティアを、スタッフはどう考え、どう接したら良いのでしょうか。『人手不足解消のための無償の労働力』、『単なるお手伝い』。こんなふうにボランティアを捉えている場合があるかもしれません。スタッフがそんな接し方をしていれば、ボランティアが意欲的に喜びを持って活動する気持ちになるはずもありません。アンケートからこんな具体例が出ています。

- お手伝いではなく、ボランティア一人ひとりの特性を活かす、やる気と意欲を大切にする。
- 自発的に取り組める環境作りと、まかっせきりにしないスタッフの体制。
- 職員のお手伝いではなく、ボランティア一人ひとりの特性を活かし、活動に協力することで独自性を発揮できることではないかと思う。
- ボランティアの力を引き出し、ボランティアにとってやりがいのある活動の機会、場の設定。
- 児童館の都合だけで「使う」のではなく、ボランティア自身の主体性を尊重し、学び、育つ場となるようにしていくことで、ボランティア活動が活性化していく。
- 活動に対して、職員がしっかりと評価し、認める事。評価した上で、より良い活動を検討し、ボランティア自身のやる気を引き出す。「職員の思い通りに動いてもらう」のではなく、「自分で考え、自分から動く」ようにする。

この記述からも伺われるよう、『単なるお手伝いと考えない』、『ボランティアの特技（独自性）を活かす』、『ボランティアを認め、主体性を引き出す』ことが大切とわかります。ボランティアはスタッフにはない力を持ち、共に児童館活動を支えるスタッフの良きパートナーとして捉えられます。職員とボランティアは、子どもに対する援助者として、対等の立場にあると、職員が認識することが大切です。

もう一つこんな記述もあります。

- ボランティアの方々が児童館を拠点に活動を楽しんでくれている。「楽しい」がポイントと思われる。
- 行事などに参加して得た達成感や子どもたちとのふれあいがあることだと思います。
- いろんな地域の方々との交流により子どもたちと遊び、共に楽しむ、さらに感動していくこと。

ボランティア活動には『楽しさ』という要素が重要なようです。スタッフのパートナーだから、「つらいことがあってもあたりまえ」と思って接していくはいけません。ボランティアが活き活きと継続的な活動を推進するために『楽しさ』をどう感じてもらうか、そしてその『楽しさ』は、その本人の生きる歓びにつながる質の高いものであってほしいと考えます。特に、小・中学生のボランティアのメンバーにはこのあたりが重要なポイントなのかもしれません。

ボランティアの考え方②

『魅力的な児童館づくり』

「あの児童館で活動すると、なんだかおもしろそう」、「何をやっているのか、のぞいてみたい」、「この児童館で活動していると、本当に刺激的」、「こんな魅力的な児童館で活動できて、本当にうれしい」こんなふうにボランティアが思ってくれれば、自然には集まり、ボランティア活動もどんどん活性化していくでしょう。当然児童館のスタッフは日頃から、懸命に魅力ある児童館づくりに取り組んでいるのですが、そのアクションはボランティア活性化へもつながっていることを意識していくといいかもしれません。

アンケートの記述ではこう書かれています。

- 広報、PR、児童館での活動の紹介をすることで児童館への理解を深め、良さを知ってもらう。
- 児童館活動をもっとアピールして、これから的重要性、可能性を分かってもらった上で親・地域の人の協力が初めて得られるものだと思います。
- 児童館の活動をたくさんの人々に知ってもらう。何かをしてもらうだけでなく、こちらも地域に対してできることがある。

魅力的な児童館づくりの第一歩は、児童館の価値、活動内容を地域住民に伝え、理解してもらうと同時に、スタッフ自身も地域の活動に興味を持ち、その活動を支援していくことのようです。

- 児童館が大人にとっても子どもにとっても参加したくなるような魅力ある場であること。
- 開放された児童館、魅力ある児童館。普段から大人も出入りできるようにして、興味を持ってもらい、沢山の人に参加してもらう。
- 職員が一丸となり、魅力ある児童館づくりの姿勢。

この記述からも読み取れるように、ボランティアの活性化を図ることは、地域における児童館活動の充実を図ることであり、それは、地域の児童健全育成の拠点として機能する児童館の大きな役割と考える必要があるようです。



ボランティアの考え方③

3

『スタッフの意識、姿勢』

『スタッフの意識、姿勢』には、さまざまな視点があります。

- 施設のボランティア活動への指針がはっきりと打ち出されていること。
- 職員全員がボランティア受け入れの意味を共通理解する

すなわち、児童館のスタッフ全員が、「何故、児童館にボランティアが必要なのか」、「この児童館でボランティアに何を期待するのか」等のボランティア活動に対する施設の理念を理解しておく必要があります。「大人相手のことだから、あえて話さなくても、大丈夫だろう」とか、「ずっとボランティア活動があるんだから、今さら話さなくても…」とスタッフは思いがちです。しかし、一人ひとりのボランティア観はかなり違うものです。当然ボランティアからするとスタッフは同じ考え方を持っていると思っていますから、スタッフごとに対応が違うと戸惑ってしまいます。そして結果的には児童館に対する信頼感をなくしてしまいます。こんなことになるまえに、一度スタッフで話し合ってみて下さい。

次には、こうしたことが考えられます。

- ボランティアへの研修だけでなく、受け入れる職員へのボランティアに対する理解や活動方法等の継続的な研修が必要。
- ボランティアのやりたい希望を生かせるようにプロデュースする職員の育成。
- 担当職員の知識、能力が不可欠（やる気があるだけでなんとかなるならば、誰も苦労はしない）。

ボランティアを担当するスタッフにはさまざまな力が要求されます。ボランティア活動に対する理解はもちろんのこと、ボランティアのメニューを組み合わせる調整力、個々の相談に応じるためのケースワーカーとしての力、ボランティアグループにかかるためのグループワーカーとしての力。

こう考えるとボランティアのコーディネートは非常に専門性の高い仕事といえます。当然、専門技術を身につけるには、適切なトレーニングの機会が必要になってきます。しかし、現実には児童館の現場で『ボランティアコーディネート』という視点での研修は、まだ少ないようです。

最後にこんな記述を紹介しておきます。

- 児童館の職員がボランティアに対して『児童健全育成』という視点できちんと助言できること。

スタッフがボランティアと向かい合う時、それはスタッフ自身の仕事に対する理念や哲学を再確認する機会になるのかもしれません。

ボランティアの考え方④

4

『地域との連携』

地域との連携は地域児童館の重要な使命であり、またいちばんの特性と考えられるでしょう。アンケートでも多くの記述がありました。

- 日頃から地域に根を据えた活動をしていることが大切。
- 地域にどれだけ児童館が受け入れられ、根ざしているか。
- 地域との連携、良好なコミュニケーション。
- 地域に開かれた施設としての着実な歩み。

ボランティア活動を活性化させるために地域との連携が必要だとわかりますが、大切なのは、『日ごろからの働きかけ』ということです。急に思い立ったように地域に働きかけてうまくいくはずがありません。結局、児童館でのボランティアの活動状況は、児童館と地域の連携のパロメーターなのかもしれません。

また、こんな記述もあります。

- 地域団体や学校との連携。
- 社会福祉協議会との連携及び情報交換。
- 地域諸団体との連携。自治会、婦人会、老人会、民生児童委員協議会、PTAなどとの緊密な連携により、活動を理解してもらうこと。

地域にはさまざまな組織があります。その組織と積極的に連携をとり、児童館と地域社会のネットワークができると、ボランティア活動もますます豊かになるでしょう。地域との連携の第一歩は、団体との連携なのかもしれません。

また、こういう方法もあります。

- ボランティアセンターとのネットワークの充実を基本に受入れ可能な姿勢をPRしていく。
- ボランティアセンターと連絡を密にし、斡旋してもらいた活性化を図る。
- ボランティアセンター等活用できるものがあれば、コーディネートの経験が少ない職員でもボランティア活用の道が開ける。

ボランティアセンターは、地域にあるボランティアコーディネート機能をもつ施設です。常駐するスタッフもボランティアコーディネートの専門家ですから、さまざまな相談にのってくれます。児童館スタッフばかりでボランティアの活性化を図ろうとせず、活用できる資源はどんどん活用する、それを心掛けましょう。

ボランティアの考え方⑤

5

『児童館の使命』

ボランティア活動活性化のポイント最後の章になります。もうお気づきかと思いますが、ボランティア活動を活性化させるために必要なスタッフのボランティアの考え方、すなわち『地域での児童健全育成事業全体を見据えたうえで児童館におけるボランティア活動をどう考えていくか』という理念や哲学』は、児童館そのものの『使命』となんらかわりがないということです。

こんな記述を紹介します。

- 地域の子どもは、地域の人たちで育てていこうという意識を育てる。
- 地域での子育てに関する意識向上が必要だ。
- 地域全体で子育てに接することができる。
- 地域の子どもたちのための活動であることを認識してもらう。

この記述からもわかるように、地域の子育て環境の向上がボランティアの活性化につながるようです。そして、地域の子どもは地域で育てるという意識、すなわち地域の子育て環境の向上は児童館の重要な使命ではないでしょうか。

- 児童館事業と地域住民とボランティアの関心、利益が一致すること。
- 子どもや地域のニーズにあった行事等の開催。

これはボランティアを活性化させるためには、児童館が地域のニーズをきちんと把握しておく必要があるということです。当然こうしたニーズの把握がなければ、児童館がその機能を果たすことができません。ここでも、ボランティアの活性化と児童館の使命の深い結びつきが伺われます。

最後にこんな記述を紹介します。

- ボランティアとスタッフが共通意識を持ち、活動に取り組んでいく。
- ボランティア活動と児童館活動の方向性が同じである。

すなわち、児童館の目標とボランティアのめざすものを一致させる(目標の明確化と打合せ)ことが重要です。ボランティアのめざすものには当然、地域の児童館に対する要望もあります。その要望は時として、児童館に新しい風を吹きこむきっかけにもなります。ただ、その要望は、スタッフが専門性を発揮して、ボランティアと共に児童健全育成の理念にあった事業につくりあげていく必要があります。

ボランティアとの共同作業は、地域のニーズを把握し、地域の実情にあった児童館事業の展開につながります。そしてそれが、ボランティア活動の活性化にはずみをつけ、活き活きとした、子どものための児童館づくりにつながっていくのでしょう。

特別寄稿5「ボランティアの活性化」

児童館職員のボランティア コーディネートに必要な視点

世田谷区ボランティア協会
山崎 富一

1 児童館は、なぜボランティアを受け入れるのか

そもそも児童館には、専門性をもった職員が配置されているのに、なぜボランティアを受け入れるのだろうか。施設にとってボランティアを受け入れることはどんな意味があるのだろうか。児童館を利用する子どもたちは、ボランティアが来ることをどのように思っているのだろうか。また、児童館側としてボランティアの関わりをどう捉えていくか考える必要があると思います。

●ボランティアには

無限の可能性がある

ボランティアの参加の動機は、何かしたい、子どもと接したい、自分を活かしたいなどさまざまです。直接児童館に関わりたいというよりは、子どもと関わりたいという人が多いと思います。

ボランティアが関わることで、児童館の雰囲気が変化することがあります。なぜなら、ボランティアには職員ではできないことがたくさんできるからです。

特に子どもまつりやキャンプ、児童館まつりなどの大きなイベントの時は、その威力を發揮します。ボランティアが関わることで、行事の企画内容が多彩になったり、地域の人びとの参加が得られるなど、ボランティアの果たす役割は大きいと思い

ます。

●ボランティアにとっての意味

ボランティアが活動に参加する時は、何かしたい、何か役に立ちたい、自分を高めたいという気持ちがあります。児童館はこうしたボランティアのパワーを得るとともに、ボランティアに対して参加の場を提供しています。ボランティアにとっては、活動に参加することで仲間ができたり、地域とのつながりができるなど、今まで経験できなかったことが得られます。そうして、ボランティアは活動を通して多くの出会いと学ぶことができます。

2 児童館におけるボランティアコーディネーターの役割

児童館の場合、ボランティアコーディネーターというより、ボランティア担当職員として位置づけられていることが多いかもしれません。ここでは、ボランティア担当職員の役割について考えてみたいと思います。

●そもそもコーディネートとは

そもそも「コーディネート」とは、2つ以上のものを対等につなぐという意味があります。児童館におけるボランティアコーディネーター（ボランティア担当職員）の役割は、まさに「ボランティア」と「児童館」をつなぎ、調整する役割があります。

ボランティアは、児童館において何かお手伝いすることを通して社会参加します。一方、児童館は、ボランティアを受入れることで日常の活動を活性化を図ることが可能になります。

●ボランティアが

活動しやすい環境とは

ボランティアが活動しやすい状況について考えてみたいと思います。まずは児童館にボランティアが来ることを担当職員以外の人が知っていることが大切です。担当者がいないと活動に参加できないことはとても寂しいことです。次にその日の活動を具体的に説明し、内容について理解を深めることが大切です。何をしてよいのか分からぬのでは、ボランティアにとって不安になります。また、継続性を高めるには、ボランティアの意欲や変化に気づき配慮したいものです。活動を終えたら感想を聞き疑問や悩みを解消するように努め不満を残さないことも大事です。ボランティアは自分の活動が本当に役に立っているのか疑問をもつことがあります。活動に対する評価や感謝を忘れないようにしたいものです。

ボランティアが活動しやすい環境は、利用者である子どもたちや職員にとっても過ごしやすい環境かもしれません。



山崎 富一(やまとざき とみかず)

1953年生まれ。大学時代からボランティア活動に参加。1981年世田谷ボランティア協会の設立とともに民間会社を退職して専従の職員となる。地域のボランティアコーディネーターとして世代分野を超えて活動。入職当初は、若い人たちとプログラムの企画を行っていたが、自分の年齢に合わせて働く人たち、シニア層と対象を変えている。モットーは、事業の企画立案運営は参加型で!

特別寄稿6「ボランティアの活性化」

「児童の健全育成活動の活性化に向けて」 ～なぜ ボランティアが必要か～

大正大学大学院
吉澤 英子

児童館は地域に根ざす存在になることが求められている筈ですが…。なぜかそうとは言えない現状です。現在の子どもたちの生活拠点、その居場所は、家庭でもなく学校でもなく…と、はっきりしていない様子が伺えます。子どもの日々の生活は、何処ででも自己実現の機会もなく、社会的認知欲求の不充足の連続なのかもしれません。

このような子どもの状態に応えられるのは、地域に根ざした児童館かと思われます。それも、親子・地域のあらゆる年齢層の住民にとって気の抜けない場として、どこかに魅力的雰囲気を醸しだし、共に過ごせる機会を提供する児童館の存在が理想的ではないでしょうか。

児童館は、建物や設備が整備されていることは勿論のことですが、魅力ある場となるためには、そこに入りする人々に影響されるのです。その原点には、数少ない児童厚生員（以下、職員とする）の存在、その機能の仕方如何に関わりが深いと言えます。

ところが、子ども一人ひとりや親のニーズ、地域全体や学校のニーズにも応えることは、職員には到底困難なことと言えます。したがって児童館に入りする地域の人々（ボランティアを含む）と役割を分担して、自発的に関わりをもって活動できる場作

りを考えることが大切です。例えば、野球やサッカーなどスポーツに関心のある住民、昔の遊びを知っている中高年、地域内の歴史的マップや車椅子マップなどに関心をもっている住民など、興味や特技をもって子どもと過ごすことを求めている住民など、児童館活動プログラムをもとに、時には人的資源を開発し、依頼して関わりをもってもらうことも必要かと思われます。

「地域に根ざす」ということは、地域の人々（ボランティア）が、他人事でなく児童館を地域での共有財産としての位置付け意識を持つこと、さらに地域の子どもとして、地域全体で、いわば連帯感に支えられて、子どもの健全な育成を願うことに基点をおいての活動でなければなりません。そして、地域の人々が、オープンにされた児童館活動プログラムとのタイミングを配慮しての、自主的参加が望まれます。

このようなことが、日常的な動きとなるためには、職員の不断の努力が求められるのです。それには、住民やボランティアとしての立場（職員とは異なる）をわきまえて、お互いに快く動ける状況や場作りをすることが大切です。つまり児童館の雰囲気、すなわち人間関係の調整（ボランティアと子ども、ボランティア同士、ボランティアと他の職員など）、必要な時の適切な介入とその技術展開を心掛けていなければなりません。

ればなりません。

特に学童期の子どもの成長発達の過程には、さまざまな対人関係の持ち方を通じての学習の機会が多く必要とされているのです。現状の子どもたちの多発する問題現象の背景には、家族関係すら結べない状況で、学校でも地域でもその機会から遠ざかっていることが散見されます。子どもにとっての地域社会は、その年齢やその他を含めて上下の人間関係の持ち方、横の関係、そして複数の関係（集団活動経験）、考え方、生活スタイルなどの、自分とは異なった状況を見たり、交わり体験の過程から体感する機会となります。その機会や体験の場が地域に根ざす児童館の実体となることが重要なのです。その第一歩となるのが、ボランティアの適宜、適切な職員との協力活動となりましょう。子どもたちの健全な育成の場作りとしても…。そこで職員は、常に誰に問われても「児童館とは」「ボランティアとは」「職員の役割とは」の、少なくとも三点には、人を納得させられるような答を心していることが求められましょう。



吉澤 英子（よしざわ えいこ）

1952年日本女子大学卒業。同大助教授、関東学院大学、東洋大学教授を経て、大正大学教授として今日に至る。学生時代から50年余ボランティア活動の実践および推進に努め、初代東京ボランティアセンター所長、国および都の社会福祉、児童福祉、生涯教育（学習）審議会などの委員を歴任。現在は、渋谷ボランティアセンター運営委員長を務める。

ボランティア ここが困った！一問三答

Q1 ボランティアへのお礼の考え方

ボランティアの方に活動をお願いした時、『今の時代、ボランティアも無償ではない』と言われたことがあります。施設としても、なんらかの形でお礼したいと思っていますが、どのような形で、どれくらい支給したらよいのでしょうか。また、最近は予算も厳しく、毎回支給することが難しい場合には、どのようにしたらよいのでしょうか。

A1 実費弁償という考え方が主流

ボランティア活動に対する謝礼は、支給している施設もあれば、支給していない施設もあります。ただし、例えば消耗品などの実際に活動にかかった経費については、施設が支払うべきです。また、実費弁償という考え方からすると、できれば、弁当代・交通費などをできる範囲で支給するという考え方が主流になってきています。

A2 条件を明確に伝えよう

例えば、年間のべ7,000人のボランティアが活動している大型児童館があると仮定します。交通費と弁当代として、1人につき1,000円支給すると、年間でその経費は700万になり、施設運営のための財政を圧迫してしまいます。実費弁償として支給できる範囲をボランティア活動のオリエンテーション時に、明確にしておくことが必要です。

A3 活動の価値を認めていることを伝えよう

施設によっては、どうしても支給できないこともあると思います。その時には、最初から支払えない旨を伝えておくことが大切です。支給できないことを過度に心苦しく感じる必要はありませんが、その活動の価値をスタッフや施設が認めていることを伝えることが大切です。また、現状を当たり前だと思わずに、役所に対して予算の措置をお願いしていくことも必要です。



現代のボランティア活動に対する謝礼の考え方は、交通費などの実費弁償はしていくという考え方方が主流になってきています。これは、活動に対する謝礼ということでなく、活動をするためにボランティア自身が負担する交通費・食事代などを弁償することにより、無理なく活動を継続してもらおうというものです。ただし、施設によっては、予算的に厳しく支給できないという現実があります。そのために「心苦しくて、活動をあまり依頼できない」、「ボランティアに対して言いたいことが言えない」では、ボランティアにとって、施設にとってあまり良い状態ではありません。大切なことは、現状でできることはしっかりと行なうと同時に、現状を改善するための努力をすることです。現状でできることとしては、ボランティア

活動に入る前に、しっかりと条件を伝えるということです。ボランティアはその時点での活動するか、しないかを選択できます。後は変に心苦しく考えることはなく、協働して活動の充実を第一に考えていいべきことです。もう一つは、感謝の気持ちを忘れないことです。それは、日頃の言葉掛けだったり、年に1回、感謝の気持ちを表した会を行なったり、工夫次第でいろいろできます。改善のための努力とは、現状を当たり前だと思わないことから始まります。ボランティアが活動しやすいようにスタッフができるのではないかと工夫をしたり、ボランティア活動の記録などをまとめ、役所に対して予算の措置などをお願いしていくことも大切です。

Q2 ボランティアとスタッフの関係づくり

ボランティアの中には、スタッフよりも児童館での活動歴が長い方がいて、意見が食い違うことがあっても、なかなかそれを言うことができません。逆に、ボランティアからは、「職員が異動するとなんとなく来館しづらくなる」と苦情を言われたこともあります。ボランティアとスタッフとの関係づくりはどのようにしたらよいのでしょうか。

A1 児童館活動のシステム化が必要

児童館の場合、少ないスタッフで運営していることが多いため、スタッフ個人が前面に出るつもりはなくても、その様に見えてしまうことがあります。事業運営などはある程度システム的に行っていくことも必要です。そうすることで、スタッフの異動などにもある程度対応できますし、経験のあるボランティアのスタンドプレイなども予防できます。

A2 児童館の使命を理解してもらおう

児童館でのボランティア活動は、児童館の社会的使命に基づいていなければなりません。やるべきことは、「ボランティア自身の自己実現」ではなく、「子どもたちが主体的に活動できることのサポート」だとしっかりと認識してもらうことが大切です。子どもの側に立って見た時に必要だと感じたときは、言うべきことは、はっきりと言うことが必要です。

A3 お互いの立場を理解しよう

スタッフとボランティアが必要以上に遠慮しあうことなく、何か疑問を感じたときなどには、しっかりと意見交換をしていくことが必要です。お互いにその結果を恐れてはいけません。こうした積み重ねを通じて、信頼関係を築いていくことが大切です。スタッフとボランティアの役割を共に理解して、補いあえるような関係を作りましょう。



児童館などの施設では、スタッフの異動などが、ボランティア活動の一つ妨げになっていると言う話を聞くことがあります。確かに、児童館は少ないスタッフで運営していることが多く、スタッフ個人に左右される面が多いと思います。スタッフの顔の見える施設、というのは児童館の良い点だと思いますが、それが周りから見たときにスタンドプレイに見えないように、事業運営などをある程度システム化していく必要があります。ボランティアとの関係も、個人的な好き嫌いの関係ではないものにする必要があります。施設のボランティアとしての所属意識を高めることで、グループとしての関係性を持てるようにしていきましょう。

ボランティアに対するアプローチとしては、「ボランティアの自立」

ということが重要なポイントとなります。社会経験の少ない学生などにはなかなか難しいことかもしれません、「児童館でのボランティア活動は、その館の果たすべき社会的使命・理念・目的に基づいていなければならない」ということをしっかりと伝えていくことが必要です。ボランティア活動の場合、ボランティア自身の自己実現というものを全て否定することはできませんが、優先されるのは館の使命だということを忘れてはいけません。スタッフは責任のある専門職として、子どもの側に立って見た時に必要だと感じたことは、はっきりと伝える責任があります。お互いの立場を理解した上ででのコミュニケーションが大切になってきます。

Q3

継続的な活動を推進するには

ボランティアとして登録している人は多いのだが、実際に活動をしている人は限られていて、なかなかボランティアの輪が広がっていません。できるだけ、継続的に活動してもらうためには、ボランティア自身にやり甲斐を感じられるようにすることが必要だと思いますが、具体的にはどのような働きか必要でしょうか。

A1 グループのコーディネートが必要

継続的に参加してもらえるような土壤づくりの一つとして、「ボランティアのグループ活動を推進させる」という考え方があります。一人ひとりがばらばらに活動に参加するのではなく、ボランティアのグループを作り、グループとして活動に参加するという形態です。そして、ボランティアの中に、お互いの活動を支援するためのグループを構成していくとより有効です。

A2 誰でも参加しやすい雰囲気づくり

ボランティアの輪を広げていくためには、誰でも参加しやすい雰囲気づくりが大切です。新しいメンバーをさりげなく受け入れていくために、親睦会などを行なうことも一つの方法です。定期的にボランティアの集まりを持つことで、ボランティア同士でお互いに支え合う雰囲気が生まれ、活動の振り返りや、疑問など話し合いの場ともなります。

A3 継続が目的でないことを忘れずに

活動を継続的に行ってもらうことで、プログラムの充実が図れ、ボランティア自身のやり甲斐も増すと考えられます。ただし、継続してもらうことが目的でないということを常に考えておく必要があります。児童館の活動を活性化が目的ですから、継続することによってメンバーの固定化を招かないよう充分に配慮していく必要があります。



活動を活性化するためには、ボランティアに継続的に活動をしてもらうことが大切です。そのためには、個人として活動に参加することよりも、グループとして組織的に活動してもらえるようにしていくことが大切です。グループを構成することで、お互いに支えあったり、励ましたり、刺激しあうことが可能となってきます。グループを作っていくためには、まずはボランティアとスタッフが一堂に会する機会を作ることが必要です。そして、その積み重ねの中で、徐々に組織作りを図っていきます。例えば、ボランティアの連絡網を作り、施設との連絡方法を確立することも良いかもしれません。そして、活動の企画・運営するのと同時に、グループのコーディネートを自分たち自身で行っていく必要がでてきます。グル

ープ自体を支援するようなサブグループを作っていくことが鍵になります。ただし、グループとして活動する場合には、それが派閥にならないよう、常に新しいメンバーを迎える雰囲気をグループが持っていることが必要です。

一人ひとりの継続的な活動が、活動の活性化を支えていきますが、そのことは、活動のメンバーを固定化するということではありません。中には、継続性が損なわれるとプログラム自体が成り立たないものもありますが、子どもにとって「○○さん」という事より「(不特定の)お兄さん・お姉さん」という存在も大切です。グループとしてこのあたりのバランスを取っていくことが大切です。

Q4 学生ボランティアの活性化

高校生や大学生などの若いボランティアは、いっしょに身体を動かして遊んでくれるし、親近感があるので、子どもたちも楽しみにしていますが、なかなか定期的には来てもらうことができなく、残念がっています。学校などの都合もあるでしょうが、どうしたら、若い人たちに継続的な活動をしてもらうことができるでしょうか。

A1 活動のガイドラインを用意しよう

活動に参加してみたい、という学生の希望は少しずつ多くなってきているように感じます。こうした学生に対して、ただ「子どもと遊んでね」とアプローチするだけでは、学生も戸惑ってしまいます。ボランティアの心構え、具体的な活動の仕方などを整理したガイドラインを事前に作っておき、必要な時に見せられるようにしておくことが大切です。

A2 期間限定の活動を

「期間を限定して活動してもらう」という考え方も逆転の発想で、有効な方法の一つです。短期間だからこそ、目的意識も明確となりますから、学生にとっても達成感を味わいややすくなります。こうした自己実現が、次回の活動への動機付けになり、結果として活動を継続してもらうことにつながることもあります。

A3 学生を受け入れる意味を考えよう

最近は、「子どもたちが相手だったら活動してみたい」漠然とした目的で、ボランティアを志す学生が多いように思います。心構えをきちんとし、責任を持って活動してもらえるように、施設としてもある程度のハードルを設けておくことも必要です。「学生を受け入れている」という意味についても考えていく必要があります。



学生に限らず、新しい人材を受け入れるためには、関心のある人たちに対して、「こんな目的で、こんな活動をしています」などの情報を提供していくことが必要です。そのためには、目的・活動内容・条件などをまとめたボランティア活動のガイドラインが必要です。また、児童館を地域に開かれた施設にするためにも、活動の記録や写真などを掲示していくことも有効な方法です。学生の場合、長い期間でスケジュールを把握することは意外と難しく、次の年度に活動が継続できるかはなかなか分かりません。そういった意味でも、期間を限定して活動に参加してもらうことも一つの方法です。短い期間であれば、学生にとっても予定を立てやすく、責任をもって活動に取り組めます。また、目的がはっきり

りしているために、達成感が得やすく、そのことが次への参加意欲へつながっていきます。

ただし、最近の傾向として、「何となく子どもが好きだから活動をしてみたい」と漠然とした目的しか持っていないボランティア希望者が増えていていることも事実です。特に、この傾向は学生に多いように感じます。施設としては、ボランティアの自立を促す意味でも、リスクマネジメントの面からも、ある程度のハードルを設けておく必要があります。活動をする上での心構えや、子どもと接するノウハウなどを伝えたり、責任を持ってもらう意味でも、活動のためのチェックリストを作成すると良いでしょう。

Q5 施設のニーズ・ボランティアのニーズ

ボランティアのやりたいと考えていることと、施設でボランティアに対して望んでいることが一致しないことがあると、結果的にボランティアが集まらなかったりすることがあります。ボランティアの希望と、施設の意図と、どのように接点を見つけていたらよいのでしょうか。

A1 活動の振り返りを大切に

ボランティアとスタッフとのコミュニケーションをしっかりとることが必要です。施設の目的・使命などは充分に伝わっていますか。スタッフがボランティアの気持ちを把握できていますか。お互いに確認しましょう。活動をした時に、フィードバックの時間を持ち、施設の意図を伝えると同時に、ボランティアの提案なども聞いていくことが大切です。

A2 日誌などを通じた関係づくり

ボランティアにしてみると「どこまで自分たちの意見を発言してよいのか」と、戸惑っている場合もあります。お互いに遠慮していると、活動の充実にはつながりません。理解しあうための時間や関係づりが必要です。最初は、活動の日誌や日報などを作り、その中で意見や提案を書いてもらうのも良い方法だと思います。

A3 ボランティアとスタッフとの調整役

ボランティア組織がしっかりしていることが前提になりますが、グループの中に、ボランティアとスタッフをつなぐことを目的としたメンバーを育成するという方法もあります。ボランティアの意見を集約し、スタッフとの打ち合わせを持つことで、効率的に意見調整をしていくことが可能となります。



活動を続けて行くと、ボランティアの心の中に、「こんな活動をしてみたい」という意欲が湧いてくることがあります。児童館活動の目的に適していることであれば、この気持ちは尊重してあげることも大切です。実際には、限られた時間や予算の中で活動をしていかなくてはなりませんから、すべてのボランティアの気持ちを尊重することはできません。

何度も言っていますが、こうした中で、お互いが遠慮して自分の気持ちを表現できないようでは、その影響は子どもたちの活動に出てしまいます。ですから、スタッフは専門的な責任のある立場から、活動ごとに施設の意図をしっかりと伝えて、ボランティアに任せられる範囲・条件を提示していくことが大切です。そうするこ

とで、ボランティアは、そのガイドラインに沿って、自分たちのやりたいという気持ちを実現させていくことができます。

ボランティアとスタッフが信頼関係を築いていくためには、日頃からの関係性が大切ですから、スタッフも活動の日誌や日報などを作り、意見交換をしたり、活動のフィードバックの時間を持って、ボランティアの意見を聞いたりする姿勢が大切です。

ボランティアの組織づくりができると、ボランティアと施設との連絡役を、ボランティアが担うことも可能となりますが、まずは、ボランティア同士、ボランティアとスタッフが自由に話し合える時間をしっかりと持つようにしましょう。

Q6

熱意が違う方向に向いている

クラブなどの指導をお願いしているボランティアに多いようですが、継続的に活動をしていくことで、次第に高度な技術などを子どもたちに伝えるようになります。結果として当初の目的であった子どもが遊びとして魅力を感じられるクラブとは、異なった姿になってしまったように感じますが、どのようにしたらよいのでしょうか。

A1

客観的な判断

こうしたケースでは、「ボランティアが非常に熱心に活動してくれているので言い辛い」という心情は分りますが、責任あるスタッフとしてはっきりと言わなくてはいけないと思います。クラブ活動の場合は、子どもたちも次のステップを求めることもありますから、客観的に判断をして、ボランティアと話し合うことが必要です。

A2

今の子どもとの接し方

最近は、子どもたちの間に囲碁なども流行ったり、伝統的な伝承遊びなどでも、シルバー世代のボランティアが活躍する場面も多くなってきています。これからは大切な活動だと考えられますが、そのためにはオリエンテーションなどで、活動の目的を確認したり、今の子どもと接するノウハウなどを伝えていくことが必要です。

A3

協働した運営

リスクマネジメントの面からも、クラブなどの運営をボランティアに任せきりにすることは非常に危険です。やはり、スタッフとボランティアが協働して運営していくことが必要です。いっしょに運営していくことによって、子どもたちの様子を客観的に判断しながら、活動の内容などをボランティアと話し合って決めていきましょう。



クラブなどの場合、子どもたちも経験を積むことで、少しずつ高度な内容を求めるようになるのは事実です。子どもたちはこうしたことで達成感を感じ、継続的に参加してきます。指導する立場にある者も、熱心であればあるほど、それに伴って、高度な内容を伝えたいという気持ちになっていくのは当然のことかもしれません。ただし、児童館の活動の場合は、基本的には「遊び」を媒体にしていますから、これが行き過ぎると児童館での活動の範囲を逸脱します。このバランスをとることが必要なのですが、当事者にはなかなかわからないものです。専門的な技能を有したボランティア活動の場合、内容的なことでスタッフが発言することは勇気がいることかもしれません、スタッフは子どもたちの様子

をしっかりと判断して、活動が児童館の範囲を逸脱していると判断した時は、はっきりと伝える必要があります。

少子高齢化が進んでいくであろう日本では、今後シルバー世代のボランティア活動が、今まで以上に活発になっていくと思います。シルバー世代が、子どもたちの遊びに関わることには大きなメリットがあります。伝承的な遊びだったり、高齢者と接することだったりいろいろです。ただし、そのためには、シルバー世代のボランティアに、今の子ども像をしっかりと理解してもらい、子どもたちと接するノウハウを伝えていくことが必要です。

ボランティア ここが困った！一問

Q7

ボランティア体験学習への対応

最近、学校から、授業の一環としてのボランティア活動や、社会福祉協議会などの実施するボランティア体験事業への協力依頼が増えてきています。ボランティア活動に関心をもってもらうため、なるべく受け入れるように努力していますが、実際に活動への意識が低いことが多く困っています。

A1 目的によって活動を区分しよう

自発的に参加する『本来のボランティア活動』と、単位の取得を目的とした『単位・宿題型』、活動の体験をすることで関心を高めてもらうための『体験学習型』との区分をしっかりとすることが必要です。そして、それぞれオリエンテーションや活動内容を区別していく必要があります。

A2 利用者のことを見直す

児童館がこうした生徒・学生などを受け入れることは、地域に開かれた施設として大切な役割だと考えられます。ただし、最も大切にしなくてはいけないことは、子どもが主体の施設だということで、受け入れに際しては、施設からの条件をしっかりと提示する責任があり、場合によっては断ることも必要です。

A3 ガイドラインを作ろう

単位・宿題型、体験学習型などのボランティア活動の場合、児童館に活動を依頼してきた学校や社会福祉協議会などとの連携も必要です。本来、社会にてて活動するためのマナーなどのトレーニングは、依頼してきた学校や機関の責任で行うものだと考えられます。児童館としては、受け入れのためのガイドラインを作成しておくことが必要です。



ボランティアというものを一括りにしないで、『自発的な参加による本来のボランティア』、『単位取得などを目的とした単位・宿題型』活動、『ボランティア体験をする体験学習型』に区別する必要があります。『単位・宿題型』の場合は、期間的にも短時間のことが多く、児童館としては条件をきちんと提示した上で受け入れるかを判断する必要があります。オリエンテーションなどについても、依頼してきた学校や機関で行うべきであり、活動の内容も必ずしも利用者と接する必要はありません。

『体験学習型』については、利用者との接点も増えることから、オリエンテーションを行うだけでなく、マナートレーニングをすることも必要です。体験学習という意味では、グループ討議させて、自

分たちが守るべきマナーを考えることも良い方法だと思います。オリエンテーションなどは、児童館の指示に基づき、依頼先の学校や機関が責任を持って行うことが原則だと思いますが、このためには、児童館が体験的なボランティアを受け入れるためのガイドラインを作成しておくことが必要です。また、最終的には、児童館としても責任を負うことになりますから、依頼先だけに任せずに、児童館としても確認のためのオリエンテーションを行うことも大切です。児童館の利用者を第一に考えながら、体験的なボランティアを受け入れていきましょう。

Q8

少ないスタッフでのコーディネート

ボランティア活動は、児童館の活動を豊かにし、感謝しています。ただし、スタッフの数が少なく、どうしてもボランティアに対して、丁寧な対応ができる時間的な余裕がありません。こうした現状を踏まえた上で、どのようにコーディネートしていくべきなのでしょう。

A1

グループとして受け入れよう

個としてボランティアを受け入れることは、なかなか大変なことです。ボランティアの意識も異なれば、要望も異なります。少ないスタッフで、これに対応していくのには限界があります。ですから、ボランティアをグループとして受け入れるという考え方が必要になってきます。

A2

条件を明確に伝えよう

ボランティアのコーディネートや人材育成には、時間も経費もかかります。このことを役所などに対してアピールし、適正な人員配置をしてもらうことも必要ですが、その際には、必要な経費だけでなく、その対費用効果についての客観的な資料を整えていくとよいでしょう。ここで『活動の記録』が役に立ってきます。

A3

コーディネーターの育成

ボランティアの中に、スタッフとともにボランティアのコーディネートを担う人材を育成していくことも有効な解決手段となります。児童館単独でこうしたコーディネーターの育成を行うことは難しいかもしれませんので、社会福祉協議会などと連携して、地域で育成していくけるように考えるとよいでしょう。



少ない人員で、ボランティアを受け入れ、活動を活性化するためには、やはりボランティアの組織化が必要です。グループとして対応することで、効率的に施設の要望を伝えることができたり、ボランティアの一人ひとりの思いを着実に受け取ることもできます。ボランティア同士がお互いに支え合ったり、刺激あって活動を充実させていくことも可能になります。さらに進んで、ボランティアの中に、ボランティアコーディネーターを養成して配置したり、コーディネート的な機能を持つサブグループを構成していくことも有効な手段です。

ボランティアコーディネーターの育成については、一施設だけで行うことは難しく、地域にあるさまざまな施設と連携をとって行う

とよいでしょう。こうした連携は、地域でのボランティア活動の活性化だけでなく、子どもや子育てに関連する施設のネットワークなどにもつながっていきます。

一方、こうした取り組みには、やはり時間や経費がかかることも社会的にアピールしていく、改善するように努力していくことも大切です。そのためには、日頃から活動の様子を記録し、対費用効果が客観的に示せるような資料を作っていくことも大切な仕事です。

児童館におけるボランティア活動の実態調査

この調査は、平成14年12月に全国4,175館の児童館・児童センターに対して調査紙を直接郵送して行ったものです。翌1月までに返送していただき、2,375館からの回答がありました。(回答率56.9%)

ボランティア活動を受け入れている児童館は1,750館で、7割を超える館で実施していました。ボランティアには、小学生からシルバー世代まで参加していましたが、最も多いのは主婦層で、続いて父親・母親でした。参加小・中学生の中には、ボランティア体験学習なども含まれていると思われます。活動日は、ボランティアの層と関連しており、土曜日と平日に多い傾向がありました。活動内容としては、児童館の行事のサポート、子どもと遊ぶことが多い傾向にありました。クラブの講師だったり、行事の企画・運営など、ボランティアが中心となった活動も3割を越していました。

ボランティアの募集方法については、必要な時に、児童館にポスターを貼ったり、個別に直接依頼してということが多く、「児童館に来ている子どもの保護者に活動の手伝いを依頼している」という地域に根ざした児童館活動の様子が見えてきます。こうしたボランティア活動が児童館活動の充実に貢献しているのは勿論ですが、一方で、児童館がボランティア活動をあまり組織的に受け入れていないという現実も見えてきます。ボランティア活動をする前の研修などは、約8割の児童館では実施していません。必要な時に個別に依頼することが多いということで、研修などを行わず、活動の前の打ち合わせで済ませている様子が伺われますが、このことは、「善意でやっていたい」ということを言えない」という悩みを生み出している原因の一つだと考えられます。利用者を考えれば、児童館の目的や使命、ボ

ランティアとしての心得やマナーなどの研修は必要です。

ボランティアに対する悩みとしては、「必要な人数が確保できない」ということが最も多い、「活動が長続きしない」、「予算的な措置がない」、「スタッフとボランティアの関係づくり」などで困っているようです。必要な人数が確保できないことも、活動が長続きしないという悩みも、やはり受け入れを組織的に行っていないということとは無関係ではありません。また、スタッフが忙しく、ボランティアの受け入れのために十分な時間をとれないことも関係していると考えられます。活動の後に、定期的に振り返りを実施している館は、1割に満たないのが現実です。ボランティア自身の達成感が次の活動への動機付けになることを考えれば、振り返りの中で、スタッフと活動を評価したり、情報交換したりすることはとても大切な要素だと考えられます。予算的な面は、まだ社会的に十分な評価を受けているとは思えませんが、約半数の館で、何らかの形で感謝の気持ちを表していました。

ボランティアを受け入れていない回答した児童館は、約4分の1にあたる625館でしたが、このうち38館については、活動の受け入れ準備を進めているということでした。「事業で忙しくて、手がまわらない」ということが、受け入れをしていない理由として最も多いものでした。確かに、ボランティアの受け入れの準備には時間もかかると思いますが、ボランティアを導入するからこそ可能な事業もあり、地域の複数の児童館で受け入れのための研修をしたり、社会福祉協議会などと連携してオリエンテーションをするなど工夫していくことが大切だと考えられます。

図1. ボランティアの参加がありますか

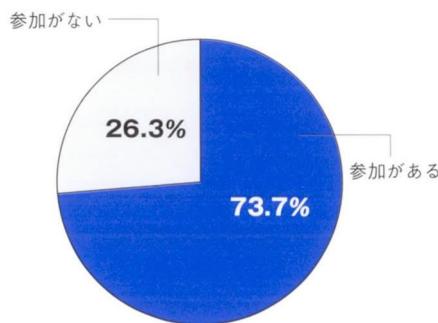


図2. ボランティアの参加層(1,750館中／複数回答可)

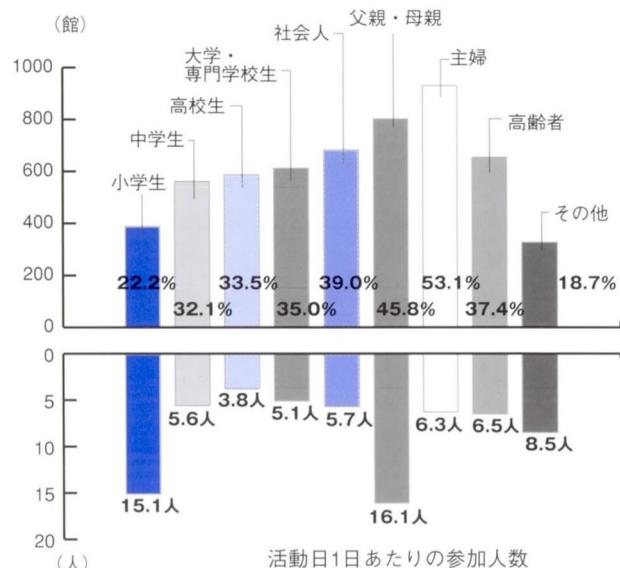


図3. ボランティアの活動日 (1,750館中／複数回答可)

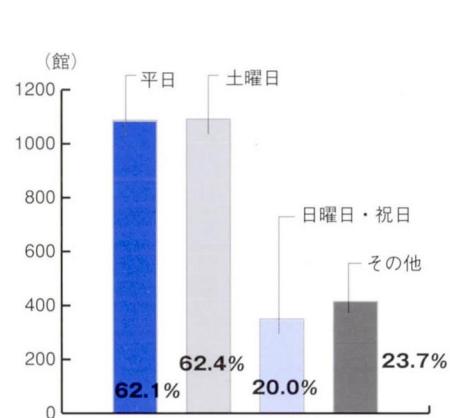


図4. ボランティアの活動内容 (1,750館中／複数回答可)

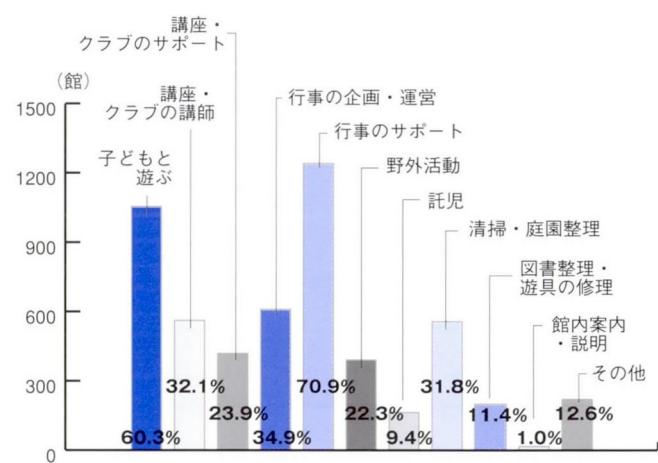


図5. ボランティアの募集方法 (1,750館中／複数回答可)

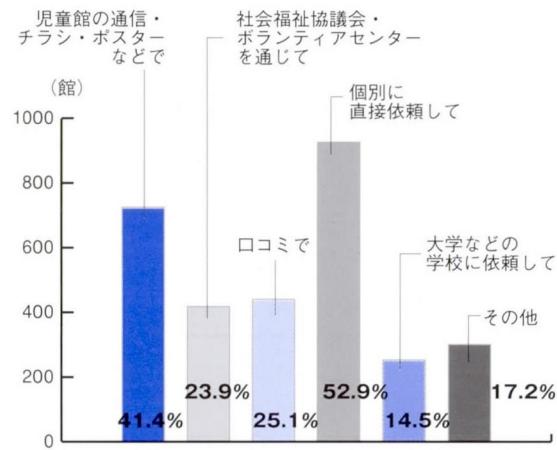


図6. ボランティアの募集期間 (1,750館中／複数回答可)

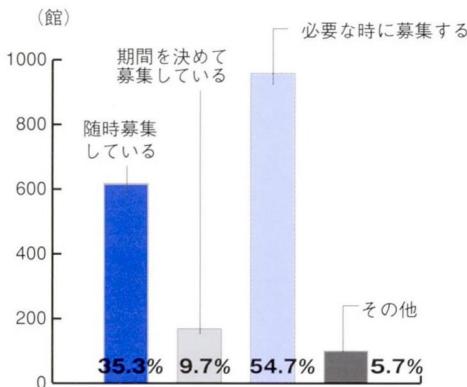


図7. ボランティア活動のためのオリエンテーション

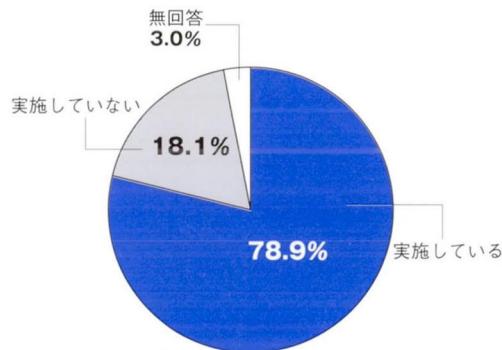


図8. ボランティア活動のための事前研修

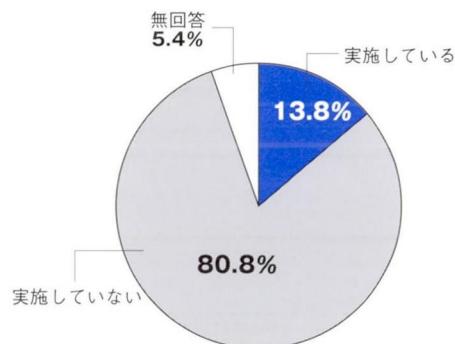


図9. 活動のための事前打ち合わせ

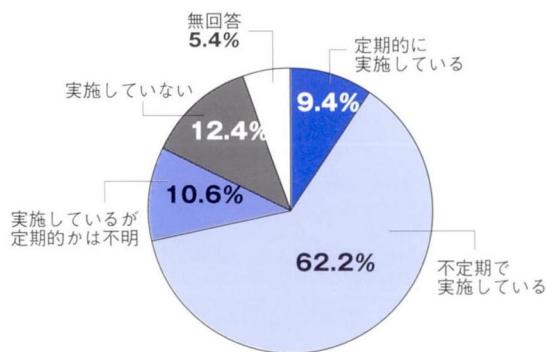


図10. 活動後の反省会

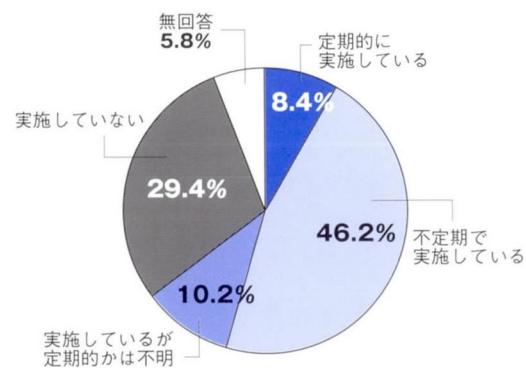


図11. 活動後の記録

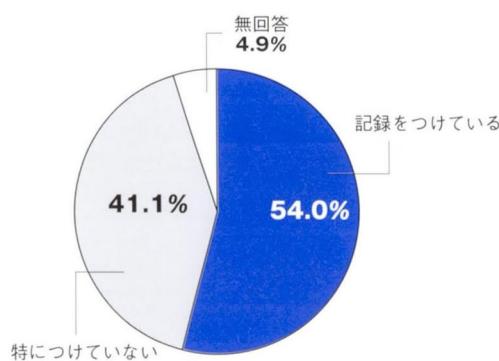


図12. ボランティア担当職員

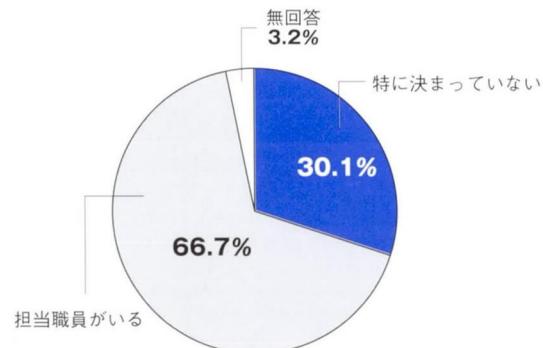


図13. ボランティア室の有無

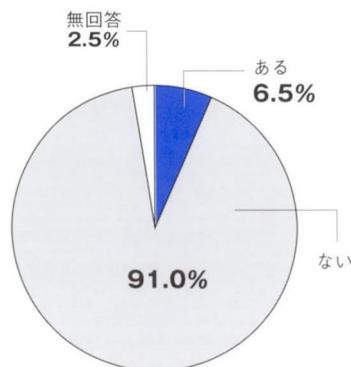


図14. ボランティアへの協力費 (1,750館中／複数回答可)

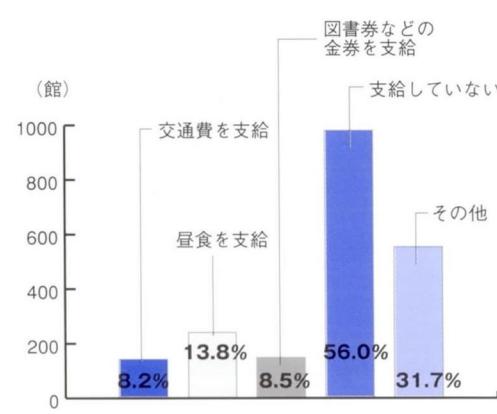


図15.ボランティア通信と制作者

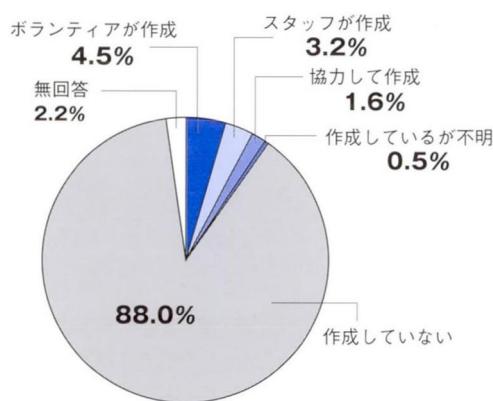


図16. ボランティアからの相談

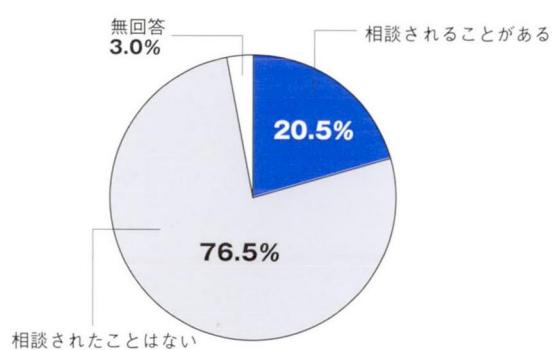


図17. ボランティアに対する悩み

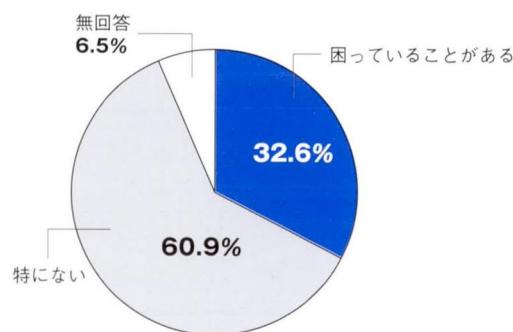
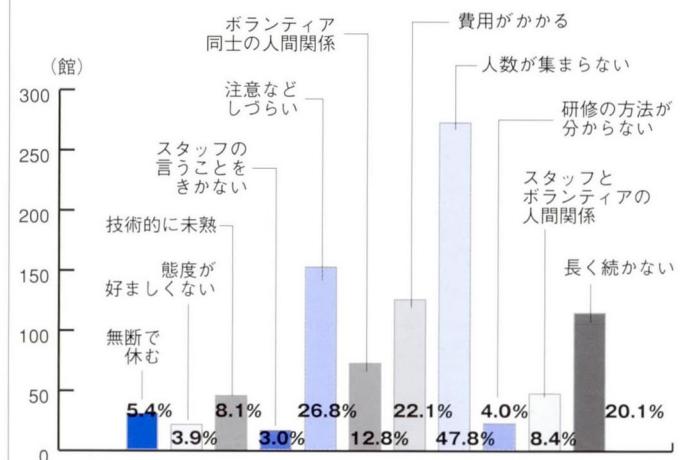
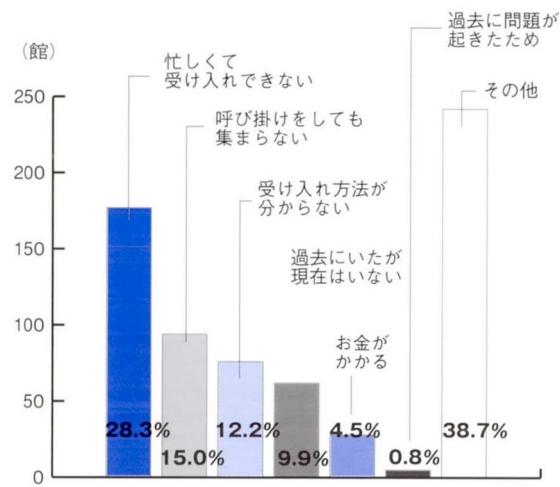
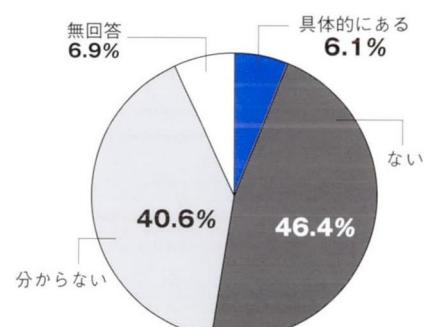
図18. ボランティアに関する悩みの内容
(571館中／複数回答可)図19. ボランティアを受け入れていない理由
(625館中／複数回答可)

図20. 今後のボランティアの参加の予定(625館中)



「小・中学生ボランティア交流事業」の概要



子どもたちに、ボランティア活動に対して関心を持つてもらいたいと、平成12年度から3年計画で実施してきた「小・中学生ボランティア交流事業」。子どもの城では、この事業を進めるにあたって、大きな一つの方針を打ち出しました。子どもたちにボランティアに関心を持ってもらうためには、さまざまなアプローチがあると思います。今回の事業では、子どもたちに直接的に働きかけるのではなく、子どもたちにとって最も日常的な「遊び」

の場面で、多くの幅広い世代のボランティアと接することで、できるだけ自然な形で関心を持ってもらおうと考えたのです。

そのためには、児童館などのボランティア活動を活性化し、活動の質的向上を図ることが大切な鍵になります。そこで、二つの柱を立て事業を行うことにしました。一つは、全国の児童館でのボランティア活動状況などの情報を収集、整理して、それを児童館へフィードバックしていくというもので、平成14年に実施したアンケート調査や本誌の発行などがこれにあたります。そしてもう一つは、各地域でセンター的な役割を担っている大型児童館で活動するボランティア同士の交流を図り、その活動の質的向上をめざすもので、「じよいんフェスティバル」として3年間にわたって実施してきました。

平成12年度

大型児童館とのボランティア交流事業の実施

3年計画の初年度にあたる平成12年度は、全国に約20館ある都道府県立の大型児童館との交流の基礎固めの年と決め、まずは、一対一での関係づくりに取り組むことにしました。幸い、平成11年には、子どもの城のボランティアの有志が、大型児童館でのボランティア活動に関するアンケート調査をしていましたので、その結果を見ながら、比較的ボランティア活動を活発に行っていた大型児童館7館との交流を計画しました。

子どもの城ボランティアを各館に派遣するとともに、各館のボランティアを子どもの城に招待し、それぞれイベントや研修などに参加して、活動についての情報交換を行いました。この年の最大

の成果は、館によってボランティアの活動形態・価値観や子どもたちへのアプローチの方法が異なるということを肌で感じることができたことでした。このことを平成13年に計画している「じよいんフェスティバル～あそびのボランティア大集合～」に生かしていきたいと考えました。なお、この「じよいん」という名称は、ボランティアする喜び“Joy”と参加する“Join”という言葉からとりました。

参加館:宮城県中央児童館（現：子ども総合センター）・栃木県子ども総合科学館・愛知県児童総合センター・富山県こどもみらい館・神戸市総合児童センター こべっこランド・さぬき子どもの国・えひめ子どもの城・子どもの城

平成13年度

じよいんフェスティバル～あそびのボランティア大集合～の実施

2年度目にあたる平成13年は、11月23～25日に、東京・子どもの城で実施する「じよいんフェスティバル」の開催に全力を注ぎました。各館のボランティアにも、できるだけ主体的に関わってもらえるように、6月と9月には、各館の代表による準備委員会を子どもの城で実施しました。第1回の準備委員会では、子どもの城の施設やプログラムを見てもらうことで、フェスティバルの全体的なイメージをつかんでもらうことに努めました。第2回は、フェスティバル当日に、子どもの城の来館者に対して実施する遊びのプログラムについて検討しました。プログラムについては、各館での活動形態を反映して、1.ボランティアの自主企画的なイベント、2.各館のプログラム活動のサポート、3.人形劇などのグループ活動の発表を柱に行うことになりました。

11月23日の午後には、全国のボランティアが一堂に会し、翌日のイベントに向けての最後の準備や打ち合わせに時間を費しました。翌24日には、自主企画として旅行をテーマとしたレクリエ

ーションプログラム、折り紙・木の実などを使ったクラフト、人形劇・紙芝居などの公演、鬼ごっこや、音楽遊びのプログラムなどに取り組みました。世代や地域を越えて集まった仲間が、お互いの違いを認め、尊重して、活動に取り組んだことで、改めて遊びのボランティアの活動意義を感じることができました。

日 時:平成13年11月23日～25日

場 所:子どもの城（東京都渋谷区）

参加館:宮城県子ども総合センター・秋田県児童会館ぐんま子どもの国児童会館・栃木県子ども総合科学館・東京都児童会館・富山県こどもみらい館・福井県児童科学館エンゼルランドふくい・愛知県児童総合センター・大阪府立大型児童館ビッグバン・神戸市総合児童センター こべっこランド・兵庫県立子どもの館・さぬき子どもの国・えひめ子どもの城・山口県児童センター・子どもの城（全15館、約250名のボランティアが参加）

平成14年度

「じよいんフェスティバル」3大会の実施

平成13年度の成果をいろいろな地域の活動に生かしていくために、愛媛・岩手・富山の大型児童館3館で、「じよいんフェスティバル」を開催しました。ホスト館の特徴を生かすため、それぞれ異なったテーマを取り組みました。愛媛県では、ボランティアイベントの自主的な企画運営、岩手県では野外活動の研修、富山では人形劇や紙芝居などの児童文化プログラムに取り組みました。

●じよいんフェスティバル 愛媛大会

日時:平成14年11月2日~4日

場所:えひめこどもの城(愛媛県松山市)

「木の実、木のまま、できちゃった」(自然物のクラフト)、「にんにん村のパスポート」(園内を回り、にんにん村を探す地図を集めるゲーム)、「にんにん村の忍者修行」(忍者修行の遊び)の、3つのプログラムを運営しました。

中学生から社会人まで106名が登録している「えひめこどもの城ボランティア」は、毎週の企画会議を重ねながら、準備活動をすすめました。平均年齢が全館の中で最も若いボランティアが、初めて大きな行事に期待と不安を抱きながらも、スタッフと共に頑張ったようです。当日は、雨のため、地図探しのプログラムを変更し、いくつかの遊び体験することで「にんにん村」の入村を許可する内容となりました。急な変更にも、多くの仲間と真剣に取り組む子どもたちの姿に支えられ、万感の思いでフェスティバルを終えることができました。

参加館:秋田県児童会館、いわて子どもの森(仮称)、宮城県子ども総合センター、栃木県子ども総合科学館、富山県こどもみらい館、福井県児童科学館 エンゼルランドふくい、三重県立みえこどもの城、大阪府立大型児童館ビッグバン、神戸市総合児童センター こべっこランド、兵庫県立こどもの館、さぬきこどもの国、えひめこどもの城、山口県児童センター、こどもの城(全14館、約100名のボランティアが参加)

『地域に発進!!ボランティア1・2・3』の発行

「小・中学生ボランティア交流事業」のまとめとして、全国の児童館におけるボランティア活動のアンケート調査を行い、その結果に基づき『地域に発進!!ボランティア1・2・3 ~児童館のボランティアコーディネート』(本書)を発行。

●じよいんフェスティバル 岩手大会

日時:平成15年3月8日~9日

場所:いわて子どもの森(仮称)(岩手県二戸郡)

雪上での野外活動を想定し、子どものプログラム活動を企画・運営するためのボランティア研修を行いました。生活を共にする活動は、子どもたちの生きる力を育む活動であり、ボランティアの技術向上は、よりよい子ども活動へのステップとなるため、メンバーが意欲的に研修に取り組みました。当日はこの地方でも珍しい猛吹雪のため、施設へ行く道路の除雪が追いつかず、宿泊地での研修実施となりました。天候により変更がある野外活動ならではの実地体験ができ、有意義な活動となりました。

参加館:秋田県児童会館、いわて子どもの森(仮称)、栃木県子ども総合科学館、神戸市総合児童センター こべっこランド、さぬきこどもの国、えひめこどもの城、こどもの城(全7館、約40名のボランティアが参加)

●じよいんじよいんフェスティバル 富山大会

日時:平成15年3月15日~17日

場所:富山県こどもみらい館(富山県射水郡)

人形劇や絵本の読み語り、パネルシアターなど、公演活動を中心に行いました。各館は、日常的に行っている公演を行っていましたが、お互いの刺激にもなったようで、活発に意見交換をしていました。また、ホスト館のこどもみらい館のボランティアが中心となって、プログラムの計画や当日進行を担当し、スムーズに公演を進めることができました。

参加館:秋田県児童会館、宮城県子ども総合センター、ぐんま子どもの国児童会館、東京都児童会館、福井県児童科学館 エンゼルランドふくい、兵庫県立こどもの館、神戸市総合児童センター こべっこランド、さぬきこどもの国、山口県児童センター、富山県こどもみらい館、こどもの城(全11館、約50名のボランティアが参加)



「小・中学生ボランティア交流事業」3年間の歩み

平成12年度	11月18日～19日	宮城県中央児童館 (現 宮城県子ども総合センター)	子どもの城のボランティアが訪問。ボランティアが自主企画運営する野外活動を中心とした研修プログラムに参加。
	12月16日～17日	神戸市総合児童センター こべっこランド	子どもの城のボランティアが訪問。ボランティアが企画運営するクリスマスイベントに参加。
	12月16日～17日	えひめ子どもの城	子どもの城のボランティアが訪問。レクリエーション研修および創作工房にて、陶芸と木工のプログラムに参加。
	1月13日～14日	愛知県児童総合センター	子どもの城のボランティアが訪問。ボランティアによる「絵本とあそぼう」の人形劇公演プログラムに参加。
	1月20日～21日	東京・子どもの城	えひめ子どもの城、栃木県子ども総合科学館、愛知県児童総合センターのボランティアが子どもの城を訪問。絵本の読み語りと、日曜クラブ(屋上での遊び活動)に参加。
	2月11日～12日	香川・さぬき子どもの国	子どもの城のボランティアが訪問。ボランティア企画の「日時計工作」「折り紙」「影絵公演」や、定例行事の「わくわくミュージックタイム」とさまざまな活動に参加。
	3月10日～11日	富山県こどもみらい館	子どもの城のボランティアが訪問。ボランティア自主イベント「パベットワールド」に参加。
	3月10日～11日	東京・子どもの城	神戸市総合児童センター こべっこランド、さぬき子どもの国、宮城県中央児童館のボランティアを子どもの城を訪問。人形劇公演、昔あそび、パネルシアター公演、屋上での路地裏あそびの活動に参加。
	6月16日～17日	東京・子どもの城	第1回準備委員会。12館のボランティアとスタッフが参加。11月に実施する「じよいんフェスティバル」の3日間の流れと、具体的なプログラム内容について検討。
平成13年度	9月29日～30日	東京・子どもの城	第2回準備委員会。14館のボランティアとスタッフが参加。遊びのプログラムのアイデア会議と内容の確認、学習会のテーマ決定、各活動ごとの最終ミーティングなどを実施。
	11月23日～25日	東京・子どもの城	「じよいんフェスティバル」の実施。24日にはボランティアの自主企画、グループでのボランティア活動、施設のプログラムサポートという3つの柱で、子どもの城来館者を対象とした「遊び」のプログラムを実施。25日は、子どもの健やかな成長を支えるボランティア活動がより豊かなものになるように、4つのテーマを決めて、ボランティア相互のディスカッションを中心とした学習会を実施。
	6月7日～8日	東京・子どもの城	愛媛大会・岩手大会・富山大会の担当者との調整会議を実施。
平成14年度	10月5日～6日	えひめ子どもの城	愛媛大会および富山大会のための準備委員会。愛媛大会の遊びのプログラムの検討、富山大会の会場説明などを実施。
	11月2日～4日	えひめ子どもの城	ボランティアの自主企画イベントを中心に実施。
	11月26日	東京・子どもの城	「地域に発進!!ボランティア1・2・3」編集専門委員会。
	12月～1月	全国の児童館	児童館でのボランティア活動の実態調査を実施。
	1月28日・2月18日	東京・子どもの城	「地域に発進!!ボランティア1・2・3」編集専門委員会。
	3月8日～9日	いわて子どもの森(仮称)	平成15年5月5日に開館する岩手県立の大型児童館で、ボランティアの野外活動研修を中心に実施。
	3月15日～16日	富山県こどもみらい館	人形劇や紙芝居などの公演プログラムを実施。
	3月	全国の児童館	「小・中学生ボランティア交流事業」のまとめとして、「地域に発進!!ボランティア1・2・3～児童館のボランティアコーディネート～」(本書)を発行。全国の児童館に配布。

地域に発進!!

ボランティア1・2・3 編集専門委員会 (委員会記録)

「小・中学生ボランティア交流事業」のまとめとして発行する、児童館でのボランティアコーディネートを目的としたマニュアル作成のために、ボランティア活動に関する有識者で構成する編集専門委員会を以下のように開催しました。

第一回専門委員会

日時

平成14年11月26日(火)13時～15時 こどもの城会議室にて開催。

議題

- ・専門委員会主旨説明
- ・児童館でのボランティアコーディネートを目的としたマニュアルの章立ての検討。
- ・アンケート調査内容の検討



第二回専門委員会

日時

平成15年1月28日(火)13時半～16時 こどもの城会議室にて開催。

議題

- ・アンケート集計結果についての考察
- ① 参加ボランティア人数・参加形態について
- ② 「体験学習」「母親クラブ」などについて
- ③ ボランティアの参加がない理由について
- ・「ボランティアの活性化のポイント」「ボランティアがいることのメリット」についての考察
(ワークショップ形式)



第三回専門委員会

日時

平成15年2月18日(火)13時半～16時 こどもの城会議室にて開催。

議題

- ・『ボランティア・ここが困った!～一問三答～』についての考察
- ・本書のネーミングについて

〈委員会名簿(五十音順・敬称略)〉

久保 和功	神戸市総合児童センター こべっこランド	運営課 課長
染川 香澄	ハンズ・オン プランニング	代表
千葉 雅人	中野区宮の台児童館	児童厚生員
山崎 富一	世田谷ボランティア協会	事業部長
吉澤 英子	大正大学大学院	教授
依田 秀任	財団法人 児童健全育成推進財団	事務局次長

編集後記

子どもたちにボランティア活動に対して関心を持ってもらうためには、どうしたらよいのか？児童館でのボランティア活動を活発にするためにはどうしたらよいのか？こうした課題に対して「子どもの城」は、どんな取り組みができるのか？こうしてスタートしたのが「小・中学生ボランティア交流事業」です。

最初の課題に対しては、子どもたちにとって最も日常的なものの一つである「遊び」を通じて多くのボランティアと会うことによって、自然に関心を持ってもらうことができるのではないか。そして、二つ目の課題に対しては、遊びボランティア活動を活発にすることが重要で、そのためにはまず、「子どもの城」と同じような大型児童館とのボランティア交流を行い、ボランティア活動の質的向上を図ることが大切ではないか。こうした考え方に基づき、3年間の事業計画を立案し、「じょいんフェスティバル」などを実施してきました。そして、その成果をまとめた意味で、今回のボランティアコーディネートの冊子を発行することにしました。

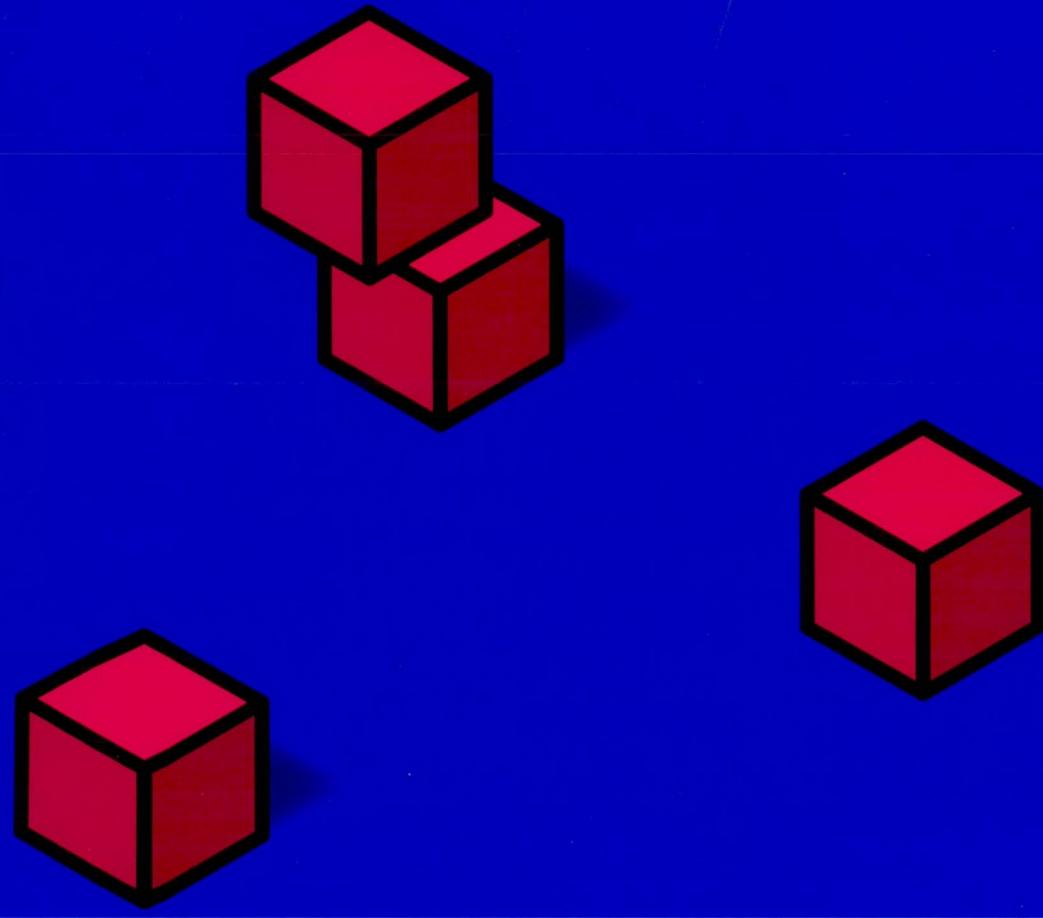
この冊子は、昨年みなさんにご協力いただいて実施した児童館のボランティア活動の実態調査をもとに作成しています。どんな活動をしていて、そのためにどんな悩みや問題点があるのか、そしてその課題を解決するためにどんな工夫をしているのか。基本的にはみなさんの声をまとめたものです。児童館の環境などによって、ボランティア活動の受け入れも異なると思いますが、基本的な考え方は共通している部分が多いと思います。本書の情報を、それぞれの館の状況に合わせてアレンジし、今後の児童館でのボランティア活動に生かしていただければ幸いです。

最後になりましたが、今回の事業に対してご協力を賜りました、社会福祉・医療事業団などの関係者の方々に、この場をお借りしてお礼を申し上げたいと思います。

国立総合児童センター 子どもの城

地域に発進！ ボランティア1・2・3 児童館のボランティアコーディネート

発行者	子どもの城（財団法人 児童育成協会）
発行日	平成15年3月25日
後援	社会福祉・医療事業団
編集	子どもの城 企画研修部 佐野真一・熊澤桂子・下村一・岡野正和・松本幸男
デザイン	有限会社 コイル
印刷	有限会社 博英社



国立総合児童センター
こどもの城